

多賀城市文化財調査報告書第62集

西沢遺跡ほか

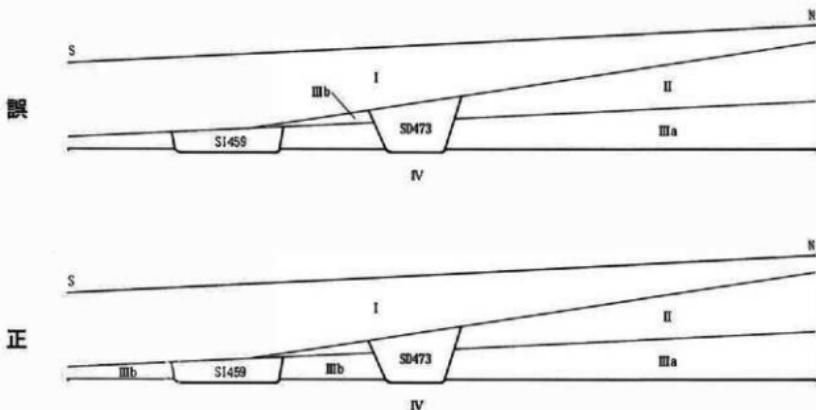
—西沢遺跡第9次 高崎遺跡第31次・33次—

平成13年3月

多賀城市教育委員会

正 誤 表

5頁 第4図 層序模式図内



頁	内 容	誤	正
3・4	第3図(タイトル)	調査図全体図	調査区全体図
3・4	第3図 調査区全体図内	SX487	S1487
45	第9図 表土出土遺物 (表組内)	No.1 須恵系土器 No.2 須恵系土器	No.1 須恵系土器・杯 No.2 須恵系土器・杯
51	第2図(タイトル)	SD1508・1509遺跡平面図・断面図	SD1508・1509溝跡平面図・断面図

序 文

多賀城市には、国の特別史跡・多賀城跡をはじめとして、古くは旧石器時代に遡るものから、新しくは近世にいたる各時代の遺跡が37ヶ所知られています。その総面積は実に市の1/4にも及び、本市の歴史が連綿と引き継がれてきたことを物語るものであります。このような遺跡は私達にとってかけがえのない文化遺産であり、かつ後世に伝えることが重要な責務であると考えています。

さて、多賀城市では、「活力とふれあいのあるまち史都・多賀城」を将来都市像に掲げ、史跡を生かしたまちづくりを展開しております。こうした流れの中にあって、重要な遺跡やそれを取り巻く環境を保存し、地域づくりの一環として積極的に整備活用してゆこうと鋭意努力しているところであります。

本書は、多賀城跡にかかわりのある西沢遺跡・高崎遺跡の発掘調査の成果を収録したものであります。それぞれの調査の成果は、本書中のとおりであります。特に、西沢遺跡では平安時代の竪穴住居跡が多数発見され、古代における多賀城跡東面一帯の様子がより具体的に把握できるようになりました。本報告書が文化財関係者のみならず、多少なりとも市民の皆様の文化財に対する普及・啓蒙の一助となれば幸いです。

最後に、発掘調査や報告書の作成にあたり、多大なご指導・ご協力いただきました方々に対し、衷心よりお礼を申し上げる次第です。

平成13年3月

多賀城市教育委員会

教育長 櫻井茂男

例　　言

- 本書は、平成12年度の国庫補助事業として実施した西沢遺跡第9次・高崎遺跡第31・33次調査の成果をまとめたものである。
- 遺構の名称は第1次調査からの連番号である。
- 本書中の遺構の分類記号は以下の通りである。
SB：建物 SI：堅穴住居 SK：土壙 SD：溝 SX：その他
- 平面図における座標値は国土座標「平面直角座標系X」を用いて設定した。
- 挿図中の高さは標高値を示している。
- 土色は『新版標準土色帖』(小山・竹原：1991)を使用した。
- 柱痕跡が確認されていない建物の方向・柱間は、柱穴の中央に柱を想定して計測した。
- 瓦の分類基準は、「多賀城跡 政府跡 図録編」(宮城県多賀城跡調査研究所 1980)、「多賀城跡 政府跡 本文編」(宮城県多賀城跡調査研究所 1982)による。
- 本書の執筆は、調査員全員の協議のもとに、I・斎藤 稔、車田 敏、II・石川俊英、III・相澤清利が担当した。また、編集は執筆者全員でこれにあたった。
- 高崎遺跡第31次調査のリン・カルシウム分析は、古環境研究所に依頼した。
- 本書の作成に際し、藤沼邦彦氏（弘前大学）、木本元治氏（福島県教育庁文化課）、菅原祥夫氏（福島県文化センター）、関根達人氏（東北大学埋蔵文化財調査センター）のご教示を得た。
- 調査に関する諸記録および出土遺物はすべて多賀城市教育委員会が保管している。

目　　次

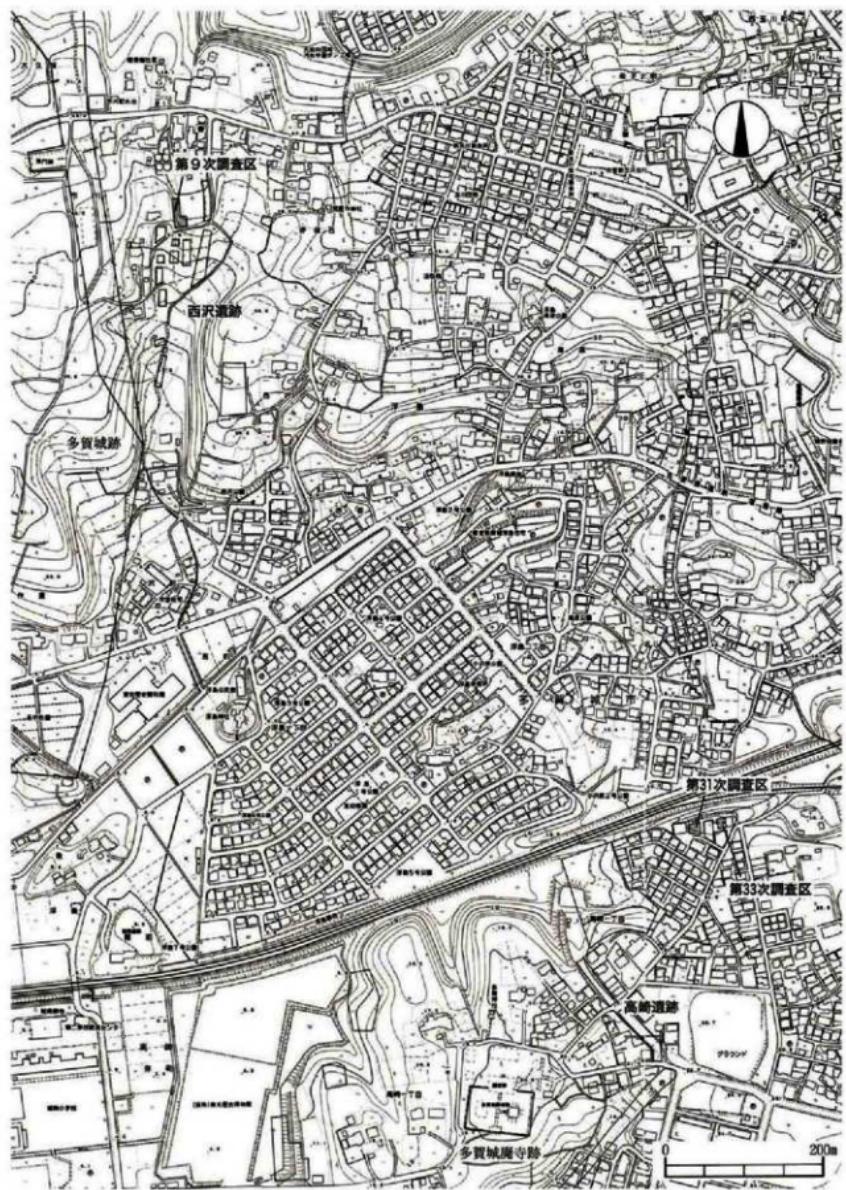
I. 西沢遺跡第9次調査	2
II. 高崎遺跡第31次調査	42
III. 高崎遺跡第33次調査	48

調　　査　　要　　項

- 調査主体 多賀城市教育委員会 教育長 櫻井茂男
- 調査担当 多賀城市埋蔵文化財調査センター 所長 長田 鮎
- 調査協力者 阿部吉夫 佐藤丑之助 佐藤信男 佐藤 誠 鈴木田建設

遺跡名	所在地	調査面積	調査期間	調査員
西沢遺跡 第9次	市川字伊保石地内	約425m ²	平成12年7月27日～11月29日	斎藤 稔 車田 敏
高崎遺跡 第31次	高崎1丁目117-1	約210m ²	平成12年4月11日～4月25日	石川俊英 佐藤恵子
高崎遺跡 第33次	高崎1丁目117-2	約260m ²	平成12年6月26日～8月26日	相澤清利 若松啓文

- 調査参加者 浅野 忠 芦野しづ子 内海義雄 遠藤一代 遠藤 実 長田栄太郎 小野玉乃
小幡 武 日下正夫 小松まり 小松吉男 今野孝男 佐々木欣哉 佐々木軍治
柴田幸四郎 菅原吉明 田中ミヨ 南城美枝子 早坂 剛 星 光治 福永孝二
真野勝雄 山田吉之助 渡辺正一 渡辺義一 渡辺ゆき子
- 整理参加者 小野寺雪子 柏倉霧代 須藤美智子 高橋知賀子



第1図 調査区位置図

I 西沢遺跡第9次調査

1 遺跡の地理的歴史的環境

(1) 地理的環境

本遺跡は、多賀城市市川・浮島の両地区に所在している。地形的には松島丘陵から塩釜方面に向かって張り出した低丘陵上の南西端部に位置し、東西450m、南北700mの範囲を占めている。標高は北側の丘陵尾根付近で約46m、南側の沖積地と接する付近で約6mであり、全体としては斜面の合間に大小の沢が入り込んだ景観を呈している。

今回の調査区は本遺跡の西端部にあたり、北側から南側に向かって傾斜する舌状丘陵の西斜面に位置している。調査区の現況は雜木林であり、標高は最も高い北側で約38m、最も低い南側で約34mである。



第2図 多賀城市の位置

本遺跡の西側には、古代陸奥国府及び鎮守府が置かれた特別史跡多賀城跡が隣接している。今回の調査区から約100m西側には平安時代の外郭東辺築地があり、その内側には城内で最大の規模を有する実務官衙域が発見された大畠地区が位置している。一方、東側には奈良・平安時代を中心とする遺物散布地である法性院遺跡、高原遺跡が所在している。

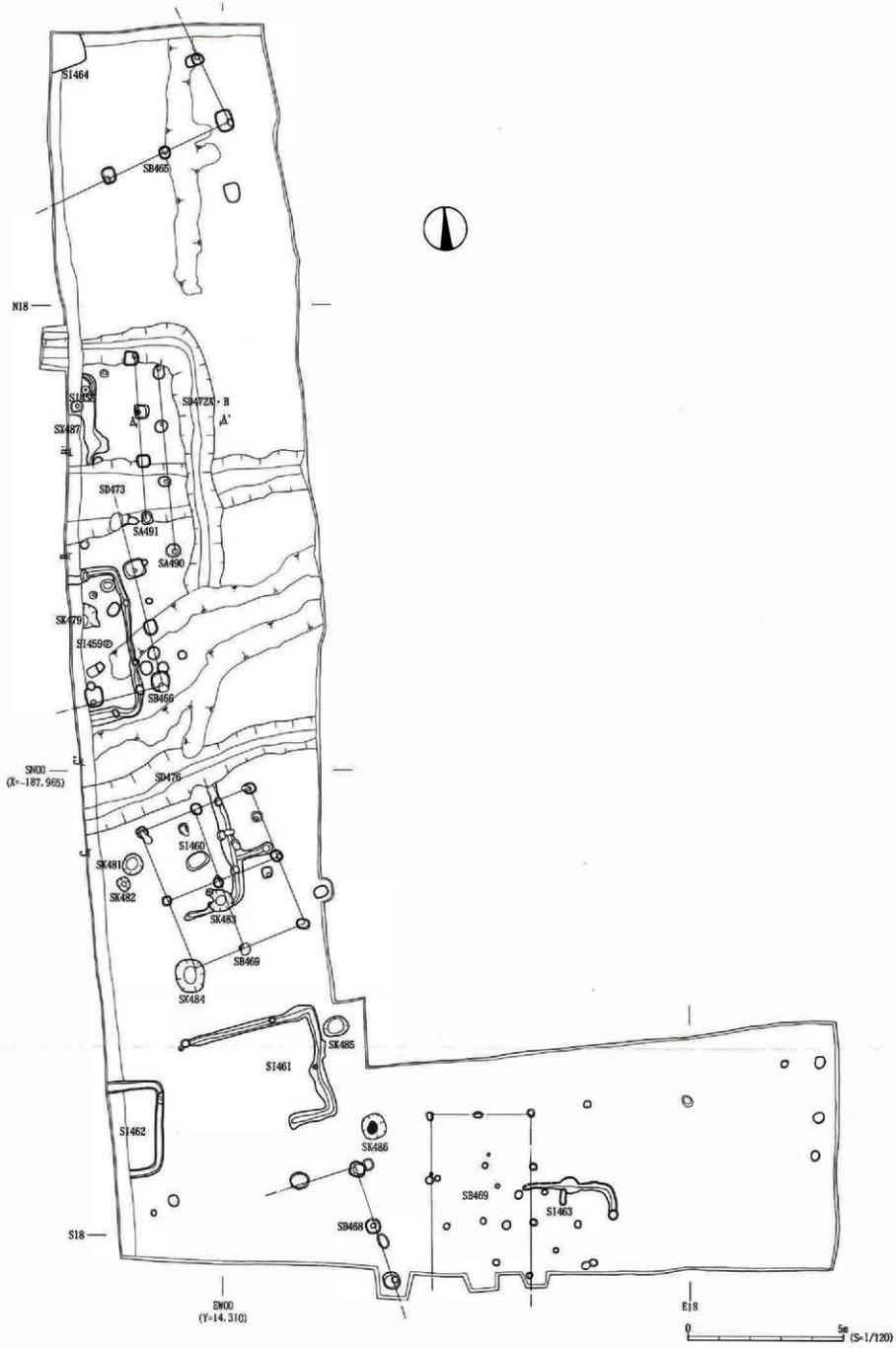
本遺跡内では、これまで8度にわたる発掘調査を実施しており、古代から近世にかけての遺構・遺物を多数発見している。本調査区東側の近接地で行った第3次調査では、平安時代の鍛冶工房跡を含む14棟の竪穴住居をはじめ、中世の建物・井戸・土壙・溝などを発見している。また東側の沢を隔てた第2次調査では、平安時代の掘立柱建物跡36棟などを発見した。出土した遺物には、縄文時代、奈良・平安時代、中世、近世の各時代のものがある。中でも平安時代のものでは、灰釉陶器、綠釉陶器、硯、石帯、馬具、その他鍛冶関連の遺物などが出土しており、多賀城との関連性をうかがわせるものである。

2 調査に至る経緯と経過

本調査は個人住宅建設に伴うものであり、複数年計画の国庫補助事業として今年度で4ヶ年目となる。当該地は西沢遺跡の範囲内であるが、過去の調査からこの舌状丘陵の頂上平坦部は掘削のため遺構の残存状況が悪く、その密度も希薄であることが指摘されていた。工事は掘削を伴うことから、まず遺構の有無を確認するための確認調査を行うこととした。その結果、竪穴住居や掘立柱建物跡を多数発見したため再び協議をおこなったところ、保存が困難なことから事前調査を行うこととした。

調査区東側に実測図作成のための原点($X=-187.968m$ $Y=14.316m$)を設置し、これを通る南北及び東西方向の軸線をそれぞれの基準線とした。調査の経過は以下のとおりである。

7月27日、重機による表土除去開始。L字の調査区を設定し、 $X=-187.974m$ より北を南北トレンチ、南を東西トレンチとした。8月1日より作業員を導入し、調査機材の搬入及び調査区の環境整備をおこな



第3図 調査図全体図

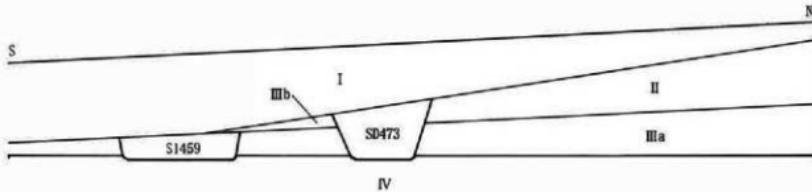
う。8月4日より切株の除去作業と併行して遺構検出作業をおこなう。これ以降、切株と根を除去する作業に大きな労力を割くこととなる。8月10日、調査区西側に堆積層を確認し、隨時掘り下げる。9月1日、遺構検出状況の写真撮影をおこなったのち、測量のビン打ちを行う。9月6日、1/20平面図作成作業開始。また、各遺構を掘り下げながら、隨時実測図作成作業と写真撮影をおこなう。11月21日以降は、調査員と数人の作業員で各遺構の細かい検討を行いながら作業をおこなう。11月29日、調査終了。

3 調査成果

(1) 基本層序

東西トレンチの基本層序は、地表下が岩盤であるが、南北トレンチは西側部分が低くなっている。その部分に堆積層が認められる。

- I層 表土層である。暗褐色土で、厚さは20~60cmを計る。古代~近世の遺物を含む。
- II層 調査区の北半にのみ堆積する褐色土で、厚さは10~30cmを計る。遺物はほとんど含まない。中~近世の遺構の検出面であり、古代の遺構を覆う層である。
- III a層 調査区の北半に堆積するにぶい黄褐色土で、厚さは15~30cmを計る。ブロック状の岩盤を多量に含むが、ほとんど遺物は含まない。古代の遺構の検出面である。
- III b層 調査区の中央部から南半にかけて堆積する黄褐色土で、厚さは6cm~23cmである。細かい岩盤粒を含むが、ほとんど遺物は含まない。古代の遺構検出面である。
- IV層 黄褐色の地山・岩盤層である。



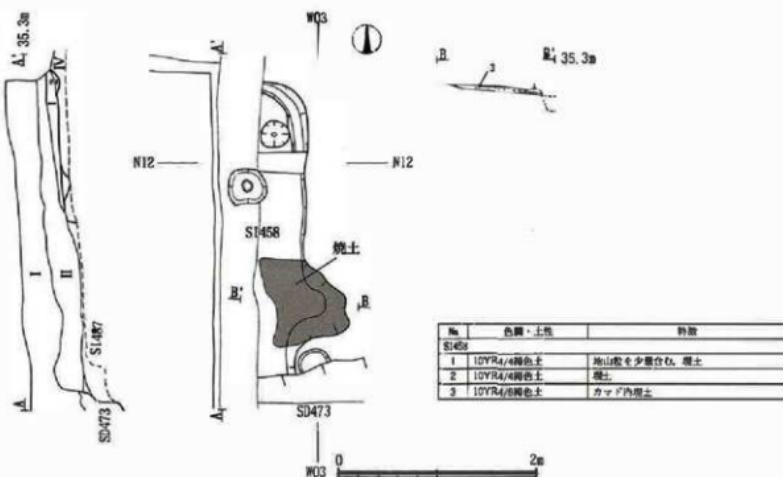
第4図 層序模式図

(2) 発見遺構と遺物

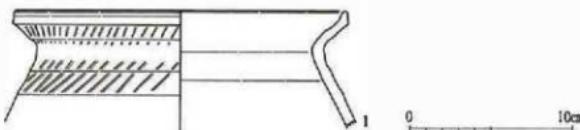
SI458堅穴住居跡

南北トレンチ中央部に位置し、地山上面で検出した。西側の大部分は調査区外に伸び、また南側をSD473によって壊されているため、東辺の一部と北東隅を発見したのみである。SD473、SI487と重複しており、SD473より古く、SI487より新しい。平面形は方形と考えられ、その規模は東西46cm以上、南北2.9m以上

である。方向は東辺でN-1°-Eである。床面はほぼ平坦であり、地山を床としている。埋土は2層確認でき、いずれも自然堆積である。周溝は北東隅で確認でき、その幅は13cmである。残存壁高は18cmである。カマドは東壁に付設されており、燃焼部のみ確認した。その規模は東西48cm、南北85cmである。床面でピットを1個確認した。遺物は土師器杯・甕、須恵器甕が出土している。土師器はすべてロクロ調整であり、カマドから出土した土師器甕は外面をタタキ成形の後ロクロ調整をしている。



第5図 SI458堅穴住居跡



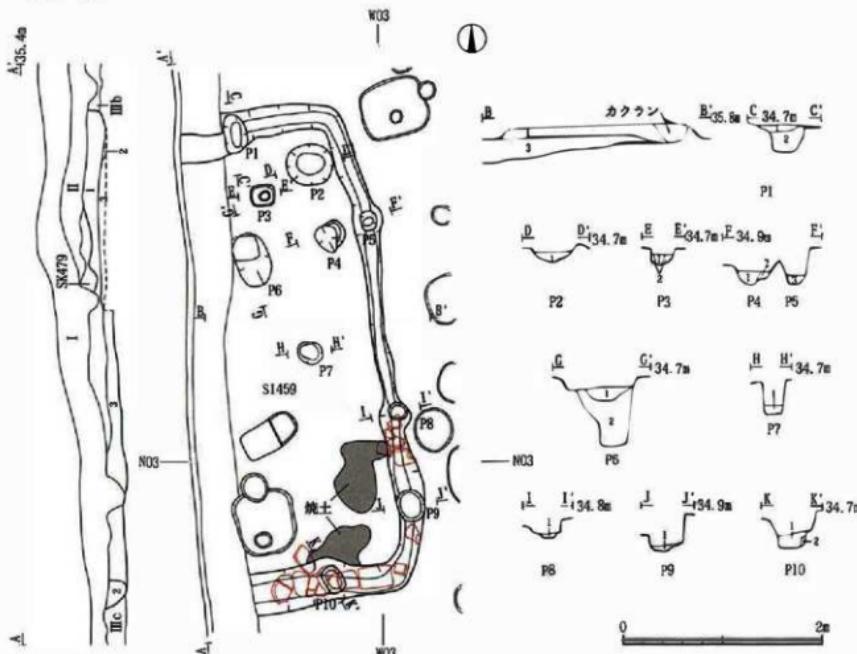
No.	遺構	層位	絶対 土年表	層構 成	特徴	口径	壁厚	底高	平底深度	登録番号
1	SI459	カマド		【外底面】タタキ→ロクロナメ 【内底面】ロクロナメ		(20.4)	-	-	-	R-151

第6図 SI459堅穴住居跡出土遺物

SI459堅穴住居跡

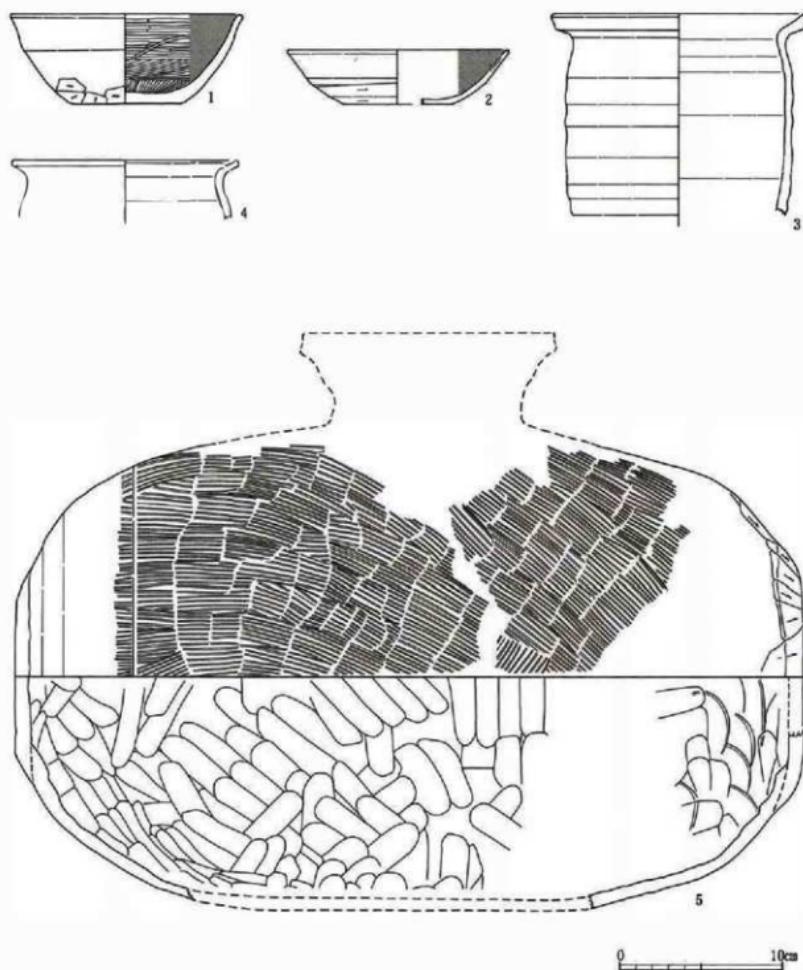
南北トレンチ中央部に位置し、III b層上面で検出した。西半分は調査区外に延びているため東半分を検出したのみである。SB466、SK479と重複しており、SK479より古くSB466より新しい。平面形は方形と考えられ、規模は南北5m、東西1.9m以上である。方向は東辺でN-10°-Wである。埋土は1層のみの自然堆積土である。床面はほぼ平坦であり、地山ブロックを多量に含む褐色土で床を貼っている。周溝は各

辺にめぐっており、幅は17~29cmである。東辺の一部と南辺の周溝には須恵器壺や横瓶の破片、平瓦、丸瓦を蓋に用いて暗渠としている。周溝には壁柱穴を5個確認した。南側の壁柱穴は暗渠に覆われていることから、2時期もしくは改修の可能性も考えられる。残存壁高は28cmである。カマドは検出できなかったが、南東隅に焼土の広がりを確認した。床面では6個のピットを検出した。遺物はI層から鉄滓、床面から土師器壺、周溝から土師器杯・壺、須恵器杯・壺・横瓶、平瓦 (II B-b類2点、II B類1点)、丸瓦 (II B類1点)、壁柱穴の抜き取り穴から土師器杯が出土している。土師器はすべてロクロ調整である。壁柱穴から出土した土師器杯は底部から体部下半にかけて手持ちヘラ削り再調整のものと回転ヘラケズリ再調整のものとが重なって出土している。須恵器横瓶はタキ成形の後ロクロ調整を施し、両端を円盤で閉じている。



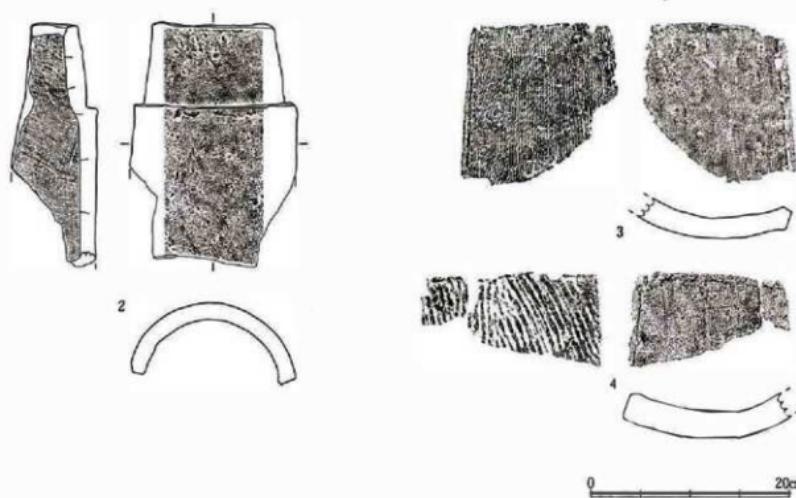
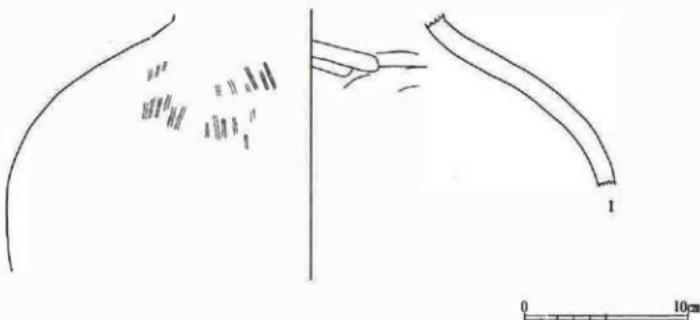
No.	色調・土性	特徴	No.	色調・土性	特徴
1	10 YR4/4 土土	埴山ブロック、埴山板を含む。焼土。	2	3 7.5YR5/4 4H 土土	埴山板を含む。同焼土。
2	10 YR4/4 4H 土土	埴山板を含む。同焼土。	3	3 7.5YR5/4 4H 土土	埴山ブロックを含む。
3	7 SYR4/4 4H 土土	埴山ブロックを多く含む。埴山板、灰鉄物を含む。耐火性。	4	10 YR4/4 焼土土	焼土ブロックを含む。埴山ブロックを含む。
P-1	10YR4/4 土土	埴山板、マンダジヤクを含む。	P-2	10YR5/4 4H 土土	3に近い黄土。埴山板、埴山ブロックを含む。
P-2	10YR4/4 土土	灰鉄物、埴山 板を含む。	P-3	1 10 YR4/4 4H 土土	焼土ブロックを多く含む。
P-3	1 10 YR4/4 土土	埴山板、焼土板を含む。	P-4	1 10 YR4/4 4H 土土	4に近い黄土。埴山板、埴山ブロックを含む。
P-4	1 10 YR4/4 土土	灰鉄物、埴山板を含む。	P-5	1 10 YR4/4 4H 土土	焼土ブロックを含む。埴山板を含む。
P-5	1 10 YR4/4 土土	灰鉄物、埴山板を含む。	P-6	1 10 YR4/4 4H 土土	焼土ブロックを含む。埴山板を含む。
P-6	1 10 YR4/4 土土	灰鉄物、埴山板を含む。	P-7	1 10 YR4/4 4H 土土	焼土ブロックを含む。埴山板を含む。
P-7	1 10 YR4/4 土土	灰鉄物、埴山板を含む。	P-8	1 10 YR4/4 4H 土土	焼土ブロックを含む。埴山板を含む。
P-8	1 10 YR4/4 土土	灰鉄物、埴山板を含む。	P-9	1 10 YR4/4 4H 土土	焼土ブロックを含む。埴山板を含む。
P-9	1 10 YR4/4 土土	灰鉄物、埴山板を含む。	P-10	1 10 YR4/4 4H 土土	焼土ブロックを含む。埴山板を含む。
P-10	1 10 YR4/4 土土	灰鉄物、埴山板を含む。			

第7図 SI459堅穴住跡



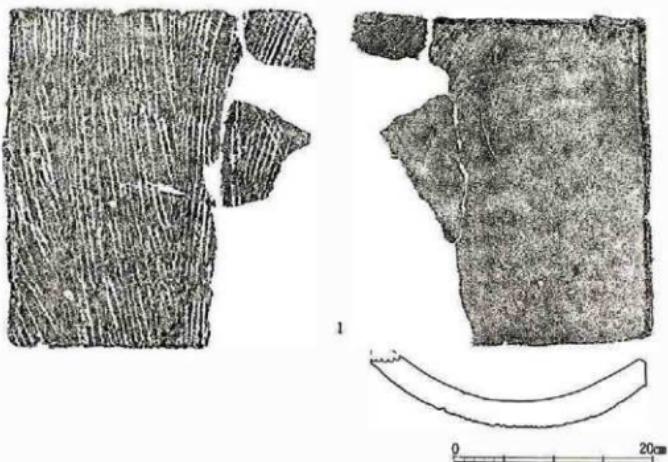
第8図 SI459堅穴住居跡出土遺物(1)

名	遺物	部位	馬羽	形状	分類	測考	口径	底径	高さ	写真番号	登録番号
1	S1459	東き取り穴	土面相	杯	[外縁] ロクロナデ→持ちヘタケズリ [底面] 手持ちヘタケズリ [内縁] ヘラシガキ→黑色地縞		14.0	6.8	5.5	図版4-1	R-142
2	S1459	東き取り穴	土面相	杯	[外縁] ロクロナデ→芯輪ヘタケズリ [底面] 胸輪ヘタケズリ [内縁] ヘラシガキ→黑色地縞	(13.4)	(5.7)	3.4	図版4-2	R-143	
3	S1459	西側	土面相	裏	[外縁] ロクロナデ		(15.5)	—	—	—	R-117
4	S1459	西側	土面相	裏	[外縁] ロクロナデ		(14.0)	—	—	—	R-118
5	S1459	西側	漆塗相	横底	[外縁] 平行ククキ→ロクロナデ→ケズリ [内縁] 亂文で縦眞筋→ケズリ	幅(8.2×29.3) 肉厚0.8	—	—	—	図版4-3	R-138



No.	遺構	部位	種別	断面	特徴	調考	口径	底径	壁高	写真図版	直轄部分
1	SI459	周溝	須泥塗	縦	(外面) 平行クタキ→ナデ (内面) ナデ	-	-	-	-	R-141	
2	SI459	周溝	丸瓦	横	(外面) 布目 (内面) ロクロナデ	II B期	-	-	-	R-42	
3	SI459	周溝	平瓦	横	(外面) 布目→ナデ (内面) 滾目 クタキ→凹凸台状痕	II B - b期	-	-	-	R-31	
4	SI459	周溝	平瓦	横	(外面) 布目→ナデ (内面) 滾目 クタキ	II B期	-	-	-	R-26	

第9図 SI459整穴住居跡出土遺物(2)

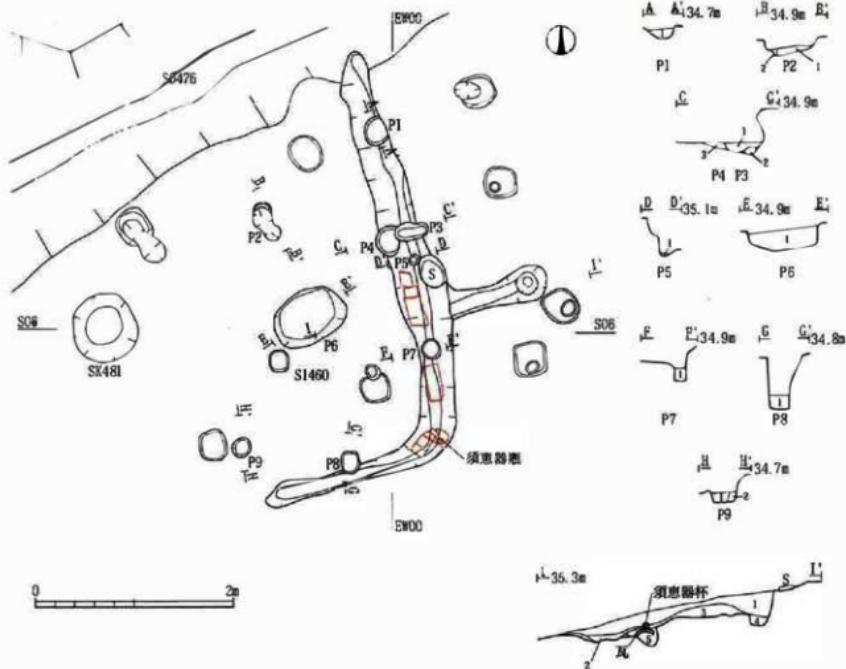


No.	遺物	形狀	種別	特徴	時代	参考	写真番号	登録番号
I	SM459	瓦器	平瓦	[西壁] 有目一タケ(凸面) 有目タタキ-凹面合併 瓦	II B-1類	-	-	R-5

第9図 SI459堅穴住居跡出土遺物(2)

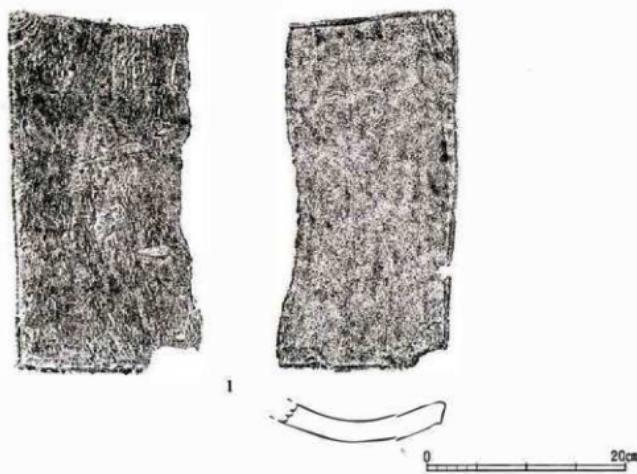
SI460堅穴住居跡

南北トレーンチ南半部に位置し、地山上面で検出した。北側はSD476に壊され、また西側は削平を受けているため、東辺と南辺の一部を検出したのみである。SK483、SD476、SB467と重複しており、SK483、SD476より古く、SB467より新しい。検出部分から平面形は方形と考えられ、規模は南北4m以上、東西2m以上である。方向は東辺でN-16°-Wである。床面はほぼ平坦であり、地山を床としている。埋土は1層確認でき自然堆積である。周溝は各辺にめぐっており、幅は15~36cm、東辺では壁がオーバーハングしている部分もある。周溝内では2個の壁柱穴を発見した。東辺では平瓦、丸瓦を用いて暗渠としているが、北東隅では瓦をささえため須恵器壺も使われている。壁は地山を壁としており、残存壁高は18cmである。カマドは東壁の中央よりやや南側の周溝上に付設されており、奥壁の一部と煙道部を検出した。側壁は残存していないが、補強材を据えたと見られるピットを2個検出した。燃焼部の奥壁は能居東壁を掘り込んで作られている。カマド内埋土2層は、鈍い黄褐色粘土ブロックと焼土粒が多量に入ることから、天井あるいは側壁の崩落土と考えられる。煙道部は長さ1.2m、幅20~37cmであり、先端には煙出しのピットを検出した。このピットは、径20cmのほぼ円形を呈し、深さは10cmである。煙道底面は西に向かって傾斜しており、東端部と西端部の比高差は12cmである。カマド前面に橢円形を呈する土壙1基、ピット6個を検出した。遺物は周溝から土師器壺・甕、須恵器壺・甕・瓶、平瓦(II B-b類)、丸瓦(II B類)、煙道部から土師器壺・甕、土壤から土師器壺・須恵器壺・甕、埋土から土師器壺・甕、須恵器壺・甕が出土している。土師器はすべてロクロ調整のものである。須恵器壺では底部がヘラ切り無調整のものが土壤から出土し、底部が回転糸切り無調整で底径が小さいものが埋土から出土している。



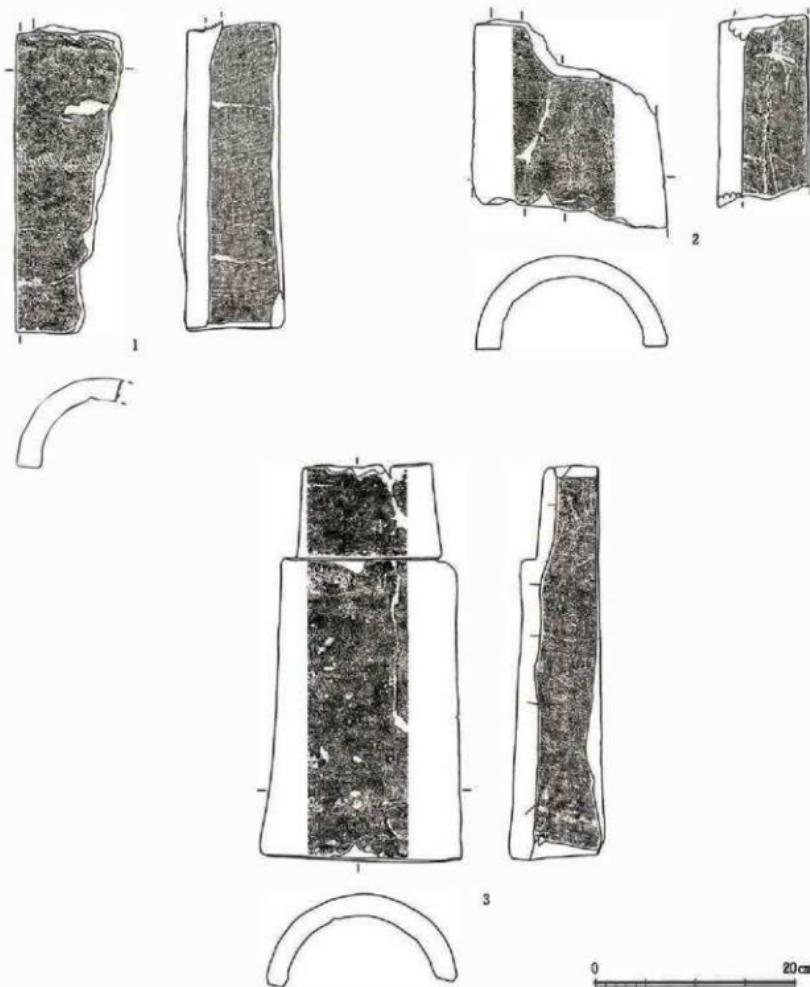
No.	色調・土性	特徴	No.	色調・土性	特徴
1	10YR4/6褐色土	地山粒、炭化物を多量に含む。	P-4	3 10YR4/4褐色土	地山粒、炭化物を少量含む。
2	10YR4/3にぶい黄褐色土	地山粒ブロック、炭土を含む。カマド内壁土。	P-5	1 10YR4/4褐色土	地山粒、炭化物を多量に含む。
3	10YR3/3褐色土	炭土、炭化物を多量に含む。カマド内壁土。	P-6	1 7.5YR3/4暗褐色土	地山粒を少量含む。
4	10YR3/3褐色土	地土、炭化物を多量に含む。カマド内壁土。	P-7	1 10YR4/3にぶい黄褐色土	地土、炭化物を多量に含む。
5	7.5YR3/6褐色土	地土、炭化物、地山粒多量に含む。J字側壁土。	P-8	1 10YR4/4褐色土	地山粒を含む。
P-1	1 10YR4/6褐色土	地山粒、地山粒ブロックを含む。	I	10YR4/3にぶい黄褐色土	地土、炭化物を多量に含む。
P-2	1 7.5YR4/4褐色土	地山粒、炭化物を少量含む。	P-9	1 10YR4/4褐色土	地石物、地土、地山粒を含む。
2	10YR5/6褐色土	地山粒、炭化物を少量含む。	P-10	1 10YR5/4にぶい黄褐色土	地山粒を含む。
P-3	1 10YR4/3にぶい黄褐色土	炭化物、地土を多量に含む。 地山粒ブロックを少量含む。	2 10YR5/4にぶい灰褐色土	地山粒ブロックを含む。	
2	10YR5/3にぶい黄褐色土	地山粒を含む。			

第11図 SI460堅穴住居跡



No.	施設	部位	種別	範囲	特徴	破面	口付	底付	側面	可穴地版	整脚基台
1	S1460	専用	底板	底板	[内外面] ロクロナデ	-	-	-	-	-	R-65
2	S1460	1-1	底板	杯	[内外面] ロクロナデ [底面] ヘラキリ	-	(7.6)	-	-	-	R-69
3	S1460	1-1	底板	杯	[内外面] ロクロナデ [底面] 印刷糸切り	(13.0)	(3.6)	3.4	-	-	R-60
4	S1460	専用	平瓦		[内面] 花瓶-ナデ [外面] 磁器-タケイ且-巴型台注瓶	口5-6周	-	-	-	-	R-4

第12図 S1460堅穴住居跡出土遺物(1)

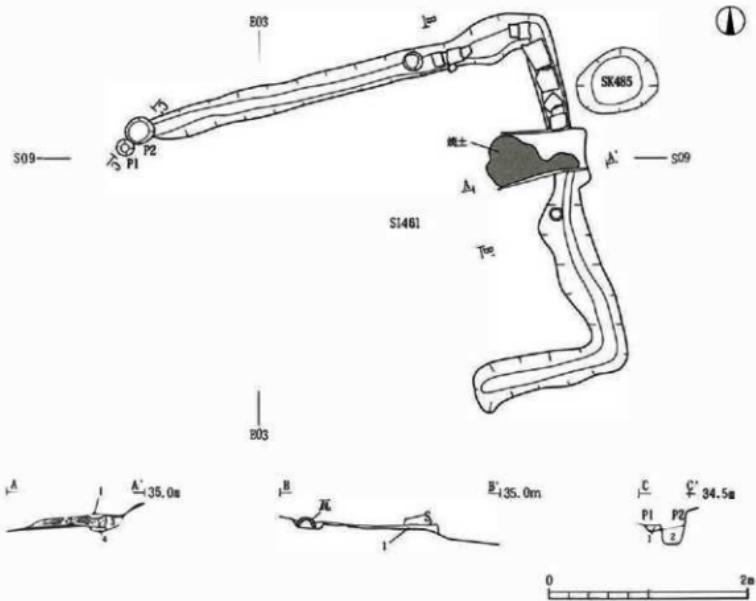


第13図 SI460竪穴住居跡出土遺物(2)

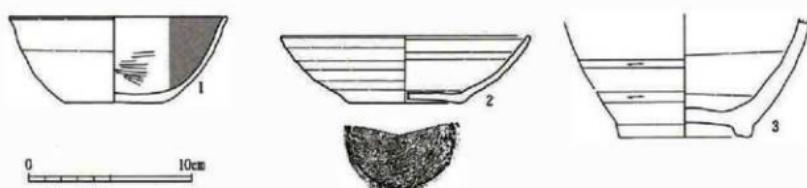
SI460竪穴住居跡

南北トレンチ南端部に位置し、地山上面で検出した。削平を受けているため西辺と南辺の一部が失われ

編	遺構	層位	種別	内容	図号	写真図版	資料番号
1	SI460	南側	丸石	[四面] 幸日 [凸面] ロクロナヂ	II-B類	-	R-3
2	SI460	南側	丸石	[四面] 幸日 [凸面] ロクロナヂ	II-B類	-	R-2
3	SI460	南側	丸石	[四面] 幸日 [凸面] ロクロナヂ	II-B類	-	R-1

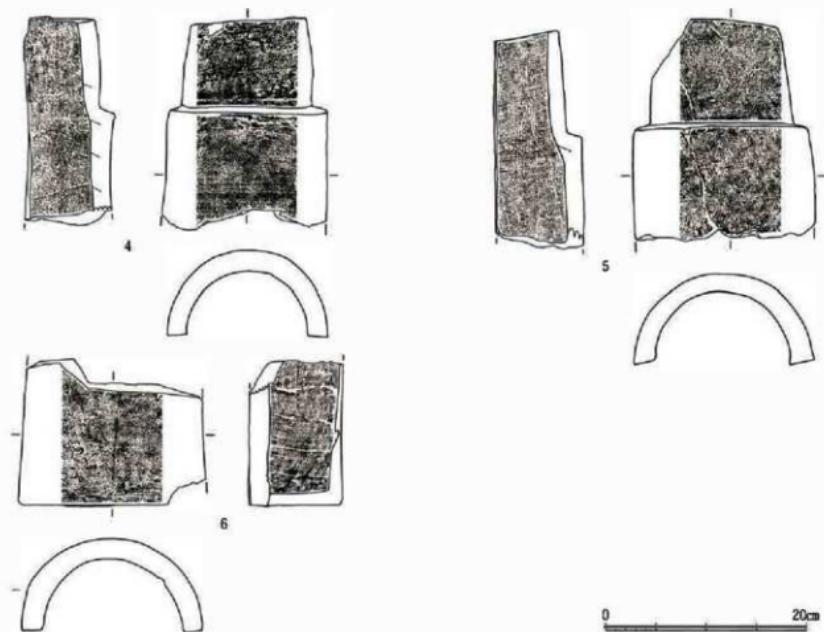


第14図 SI461堅穴住居跡



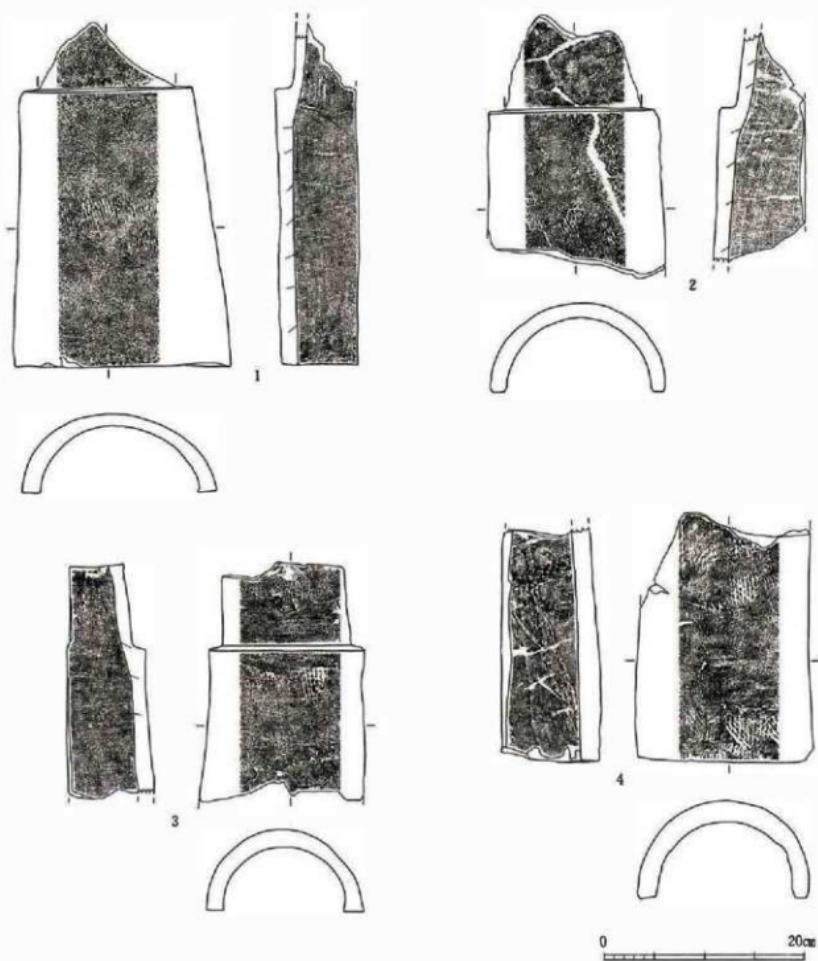
No.	遺構	想定	断面	特徴	口径	断面	断高	年次	登録番号
1	SI461	カマド下周溝	土器縁	木 [外面] ロクロナデー手捺らへラケズリ [裏面] 手捺らへラケズリ [内面] ハラミガキ=褐色動程	13.2	5.8	5.3	昭和4~4	R-55
2	SI461	周溝	須意縁	木 [外面] ロクロナデ [裏面] 回転糸切り	(15.2)	(6.7)	4.1	昭和4~5	R-61
3	SI461	周溝	須意縁	木 [外面] 田んへラケズリ、ロクロナデ [内面] ロクロナデ	—	8.0	—	—	R-412

第15図 SI461堅穴住居跡出土遺物(1)



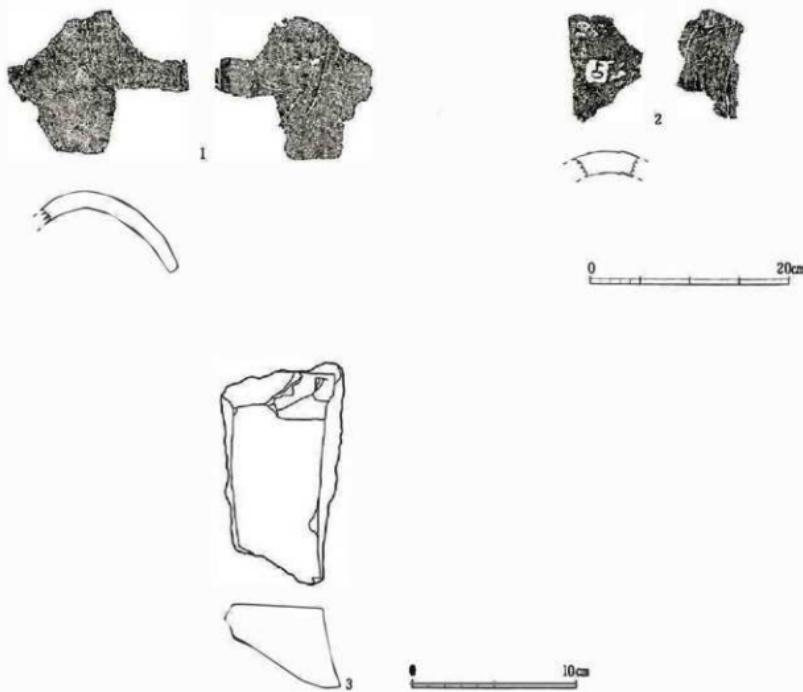
No.	遺構	型式	種別	地質	特徴	参考	口径	底径	高さ	写真図版	登録番号
1	SI461	1-1	土器	杯	【外観】素面【底面】圓盤形切り 【内面】ヘリコイド一渦巻形		-	5.9	-	-	R-124
2	SI461	1-1	埴生器	杯	【外観】ロクロナデ【底面】圓盤形切り		(5.3)	-	-	-	R-56
3	SI461	1-1	埴生器	杯	【外観】ロクロナデ【底面】圓盤形切り		5.9	-	-	-	R-47
4	SI461	周溝	丸瓦		【外観】布目【底面】ロクロナデ	6.6mm	-	-	-	-	R-41
5	SI461	周溝	丸瓦		【外観】布目【凸面】ロクロナデ	6.6mm	-	-	-	-	R-40
6	SI461	周溝	丸瓦		【外観】布目【凸面】ロクロナデ	11mm	-	-	-	-	R-32

第16図 SI461竪穴住居跡出土遺物(2)



第17図 SI461堅穴住居跡出土遺物(3)

%	遺物	部位	種別	特徴	遺物	写真面別	登録番号
1	SI461	周縁	丸瓦	[内面] 布目 [凸面] 瓦タタキ目→ロクロナデ	EB-a 瓦	-	R-33
2	SI461	周縁	丸瓦	[内面] 布目 [凸面] ロクロナデ	EB 瓦	-	R-43
3	SI461	周縁	丸瓦	[内面] 布目 [凸面] 瓦タタキ目→ロクロナデ	EB-a 瓦	-	R-35
4	SI461	周縁	丸瓦	[内面] 布目 [凸面] ロクロナデ	EB 瓦	-	R-34



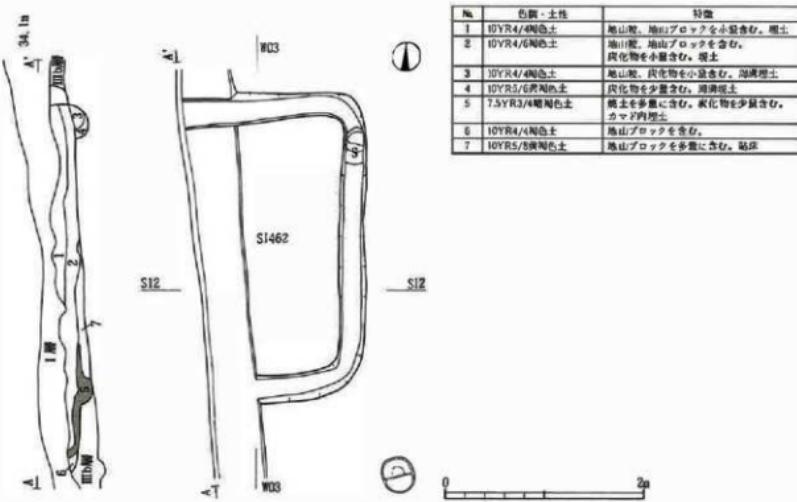
No.	造形	層位	径深	特徴	番号	参考図版	空缺番号
1	丸瓦	周溝	丸瓦	四面) 異質(凸面) ロクロナメ	R-44	-	-
2	SI461	1-1	丸瓦	四面) 7日(凸面) ロクロナメ	R-95	-	-
3	SI461	1-1	墨石	(石M) 7日	R-106	図版5-5	-

第18図 SI461出土遺物(4)

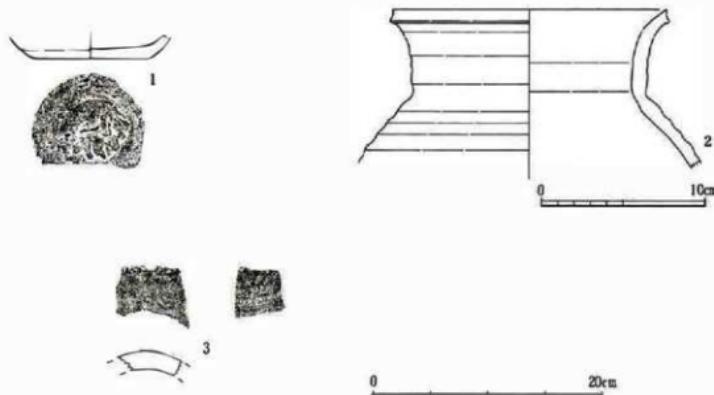
ている。平面形は方形で、規模は東西4.4m以上、南北3.7mである。方向は東辺でN-15°-Wである。床面はほぼ平坦であり、地山を床としている。埋土は1層で、自然堆積と思われる。周溝はカマドの下を含む各辺にめぐっており、北東隅には丸瓦を蓋に用いて暗渠としている。周溝には壁柱穴を4個確認した。残存壁高は26cmである。カマドは東辺に位置し燃焼部のみ検出した。規模は東西80cm、南北50cm以上である。遺物は床面から土師器杯、須恵器杯、周溝から土師器杯、須恵器壺・瓶、丸瓦(II類5点、II B類1点、II B-a類2点)が出土している。土師器はすべてロクロ調整である。周溝から出土した土師器杯は底部のみに回転ヘラケズリを施しているが、それ以外の土師器杯、須恵器杯の底部はすべて回転糸切り無調整である。1層から「占」の刻印がなされている丸瓦(II B類)が1点出土している。

SI462堅穴住居跡

東西トレンチ西端に位置し、III b層上面で検出した。平面形は方形で、規模は東西1.8m以上、南北3.1



第19図 SI462竪穴住居跡



No.	遺物	層名	種別	形態	特徴	参考	口径	底径	高さ	写真図版	管識番号
1	SI462	1-1	京瓦器	片	[内外面] ロクロナギ [底面] ヘタキリ		-	(7.2)	-	-	R-125
2	SI462	1-1	京瓦器	裏	[内外面] ロクロナギ		(16.6)	-	-	-	R-154
3	SI462	堆土	丸瓦			日版	-	-	-	-	R-25

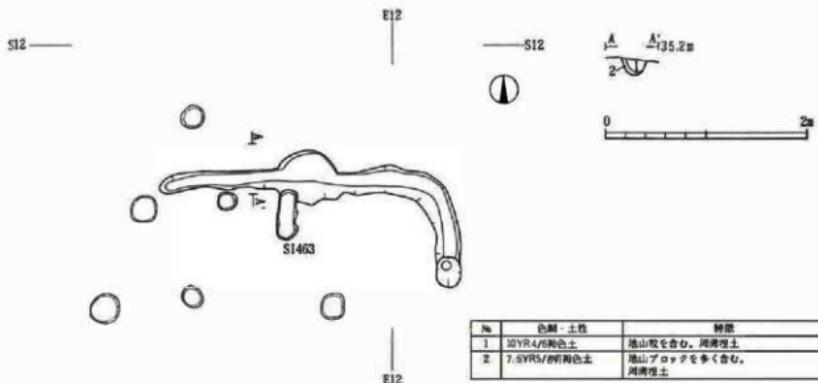
第20図 SI462竪穴住居跡出土遺物

mである。方向は東辺ではほぼ座標北に沿う。傾斜によって低くなっている南西部分を地山ブロックが多量に含む黄褐色土で床を貼り、平坦にしている。埋土は調査区西壁断面の観察では2層認められ、いずれも

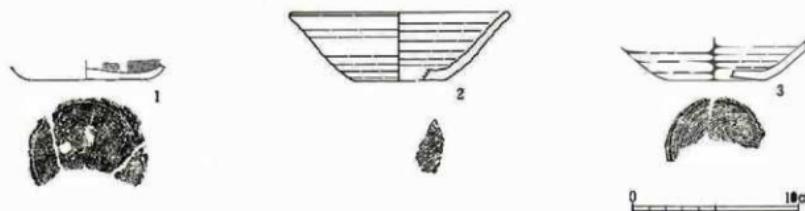
自然堆積土である。周溝は各辺にめぐっている。残存壁高は43cmである。調査区の断面においてカマドの可能性がある焼土層を確認できた。長さ1.2m、高低差は14cmである。遺物は床面から回転糸切り無調整の須恵器杯と平瓦、周溝から丸瓦（II類）が1点出土している。

SI463堅穴住居跡

東西トレンチ中央部に位置し、地山上面で検出した。ほとんど削平されており、北辺と東辺の周溝が残存しているのみである。平面は方形と考えられ、その規模は東西3m以上、南北1.4m以上である。方向は東辺でN-1°-Wである。周溝埋土は2層確認でき、いずれも自然堆積である。カマドは削平により確認できなかった。遺物は、周溝より土師器杯・壺、須恵器杯・壺が出土している。土師器はすべてロクロ調整である。土師器杯は回転ヘラケズリ再調整のものであり、須恵器壺は回転糸切り無調整である。



第21図 SI463堅穴住居跡

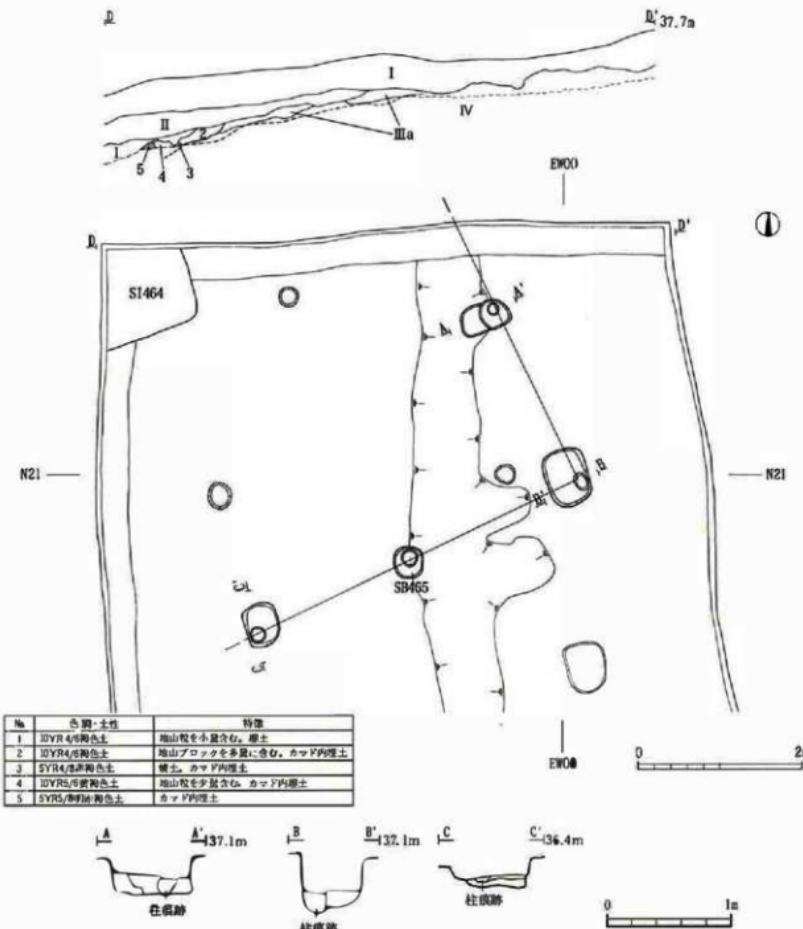


No.	遺構	部位	種別	形態	特徴	口径	底径	高さ	壁面	窓	壁厚	壁材番号
1	SI463	周溝	土師器	壺	【外曲】壺残【底面】回転ヘラケズリ 【内面】ヘラミガキ一��色底皮	-	7.3	-	-	-	R-126	
2	SI463	周溝	須恵器	壺	【外曲】ロクロナギ【底面】回転糸切り	(13.2)	(5.4)	(6.1)	-	-	R-62	
3	SI463	床止面	須恵器	壺	【外曲】ロクロナギ【底面】回転糸切り	-	(6.0)	-	-	-	R-68	

第22図 SI463堅穴住居跡出土遺物

SI464堅穴住居跡

南北トレンチ北端に位置し、III a 層上面で検出した。遺構のほとんどが調査区外に延びているため確認にとどめた。重複関係にあるSB465とは直接的な切り合いはないものの、III a 層との上下関係からこれより新しい。平面形は方形と推定され、規模は東西1.3m以上、南北80cm以上である。方向は東辺でN-21°Wである。カマドは東辺に位置し、調査区の北壁で南側壁と煙道を確認できた。煙道の長さは55cmで、高低差は27cmである。遺物は出土していない。



第23図 SI464堅穴住居跡、SB465掘立柱建物跡



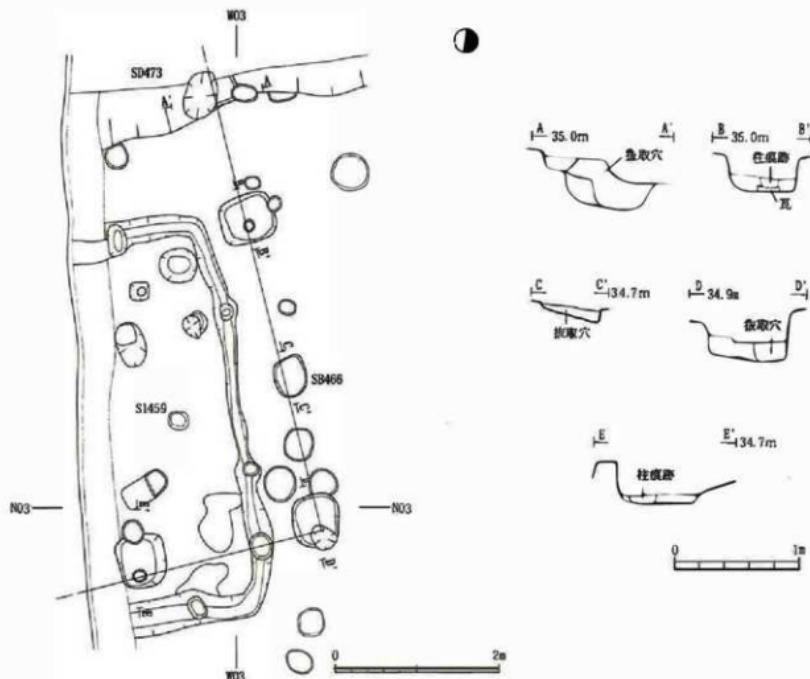
第24図 SB465掘立柱建物跡出土遺物

SI487堅穴状遺構

南北トレンチ中央部に位置し、地山上面で検出した。SI458、SD473と重複しており、これより古い。遺構のほとんどが調査区外に延びているため、確認にとどめた。遺物は土師器壺が出土している。

SB465掘立柱建物跡

調査区北端に位置し、III a層除去後に地山上面で検出した。西側が削平を受けていることや北側が調査区外に延びているため、東西柱列2間と南北柱列1間を確認したにすぎない。重複しているSI464と直接的な切り合いはないが、III a層との上下関係からこれより古い。柱穴はI基が円形ほかはすべて方形で、一边42cm～70cmを計る。すべての柱穴で柱痕跡を確認し、直径16cm～22cmである。方向は東側柱列でみると

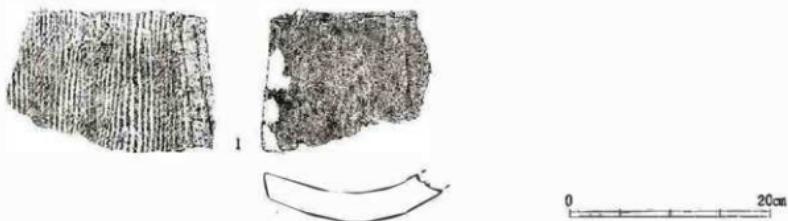


第25図 SB466掘立柱建物跡

N-16° -Wである。東側の柱間は2.2mで、南側の柱間は東より2.3m、2.1mである。遺物は土師器甕と平瓦（II B類）1点が出土している。

SB466掘立柱建物跡

南北トレンチ中央部に位置し、地山上面で検出した。北側はSD473によって壊されていることや、西側が調査区外に延びているため、東西柱列1間と南北柱列3間を確認したのみである。SI459、SD473と重複しており、これらより古い。柱穴は一辺50cm～65cmの方形で、深さは48cm残存している。2基の柱穴に柱痕跡を確認し、規模は13cm～22cmである。北より2番目の柱穴では瓦を使用して礎盤としている。方向は東側柱列でN-14° -Wである。東側の柱間は北より1.8m、1.9m、2.0mで、南側の柱間は2.3mである。遺物は、礎盤として使用された平瓦（II B-b類）が1点出土している。

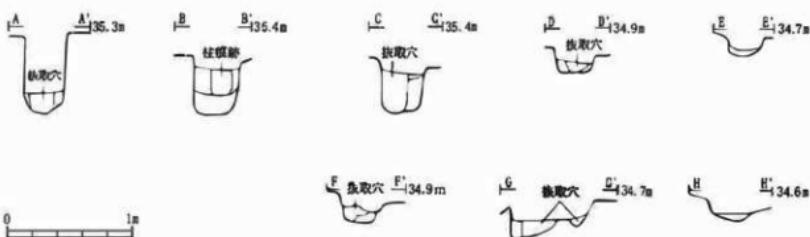


%	遺構	層位	範囲	特徴	発見場所	参考文献	登録番号
1	SB466	盛り方堆土	平瓦	【凹面】布目一ナデ【凸面】織目テキヨ一凹面台瓦頭	II B-b類。礎盤	-	R-153

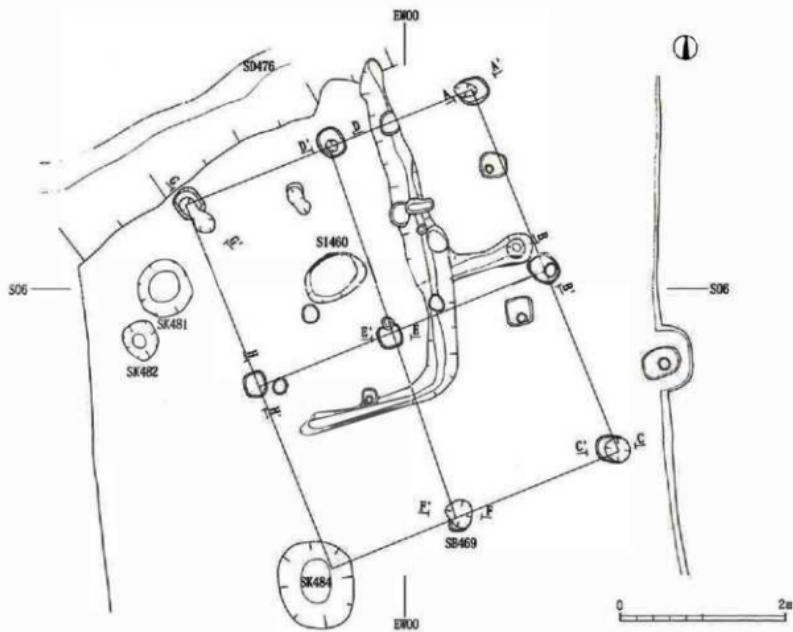
第26図 SB466出土遺物

SB467掘立柱建物跡

南北トレンチ南半部に位置し、地山上面で検出した東西2間、南北2間の総柱建物跡である。SI460、SK484と重複しており、これらより古い。平面規模は東側柱列で総長4.7m、柱間が北より2.4m・2.3m、北側柱列で総長3.6m、柱間が西より1.9m・1.8mである。方向は東側柱列でN-23° -Wである。柱穴は一辺20～35cmの隅丸方形で、深さは37cm残存している。1個の柱穴では柱痕跡を確認した。遺物は土師器甕、須恵器杯・甕・瓶、丸瓦（II類）が出土している。



第27図 SB467掘立柱建物跡柱穴断面図



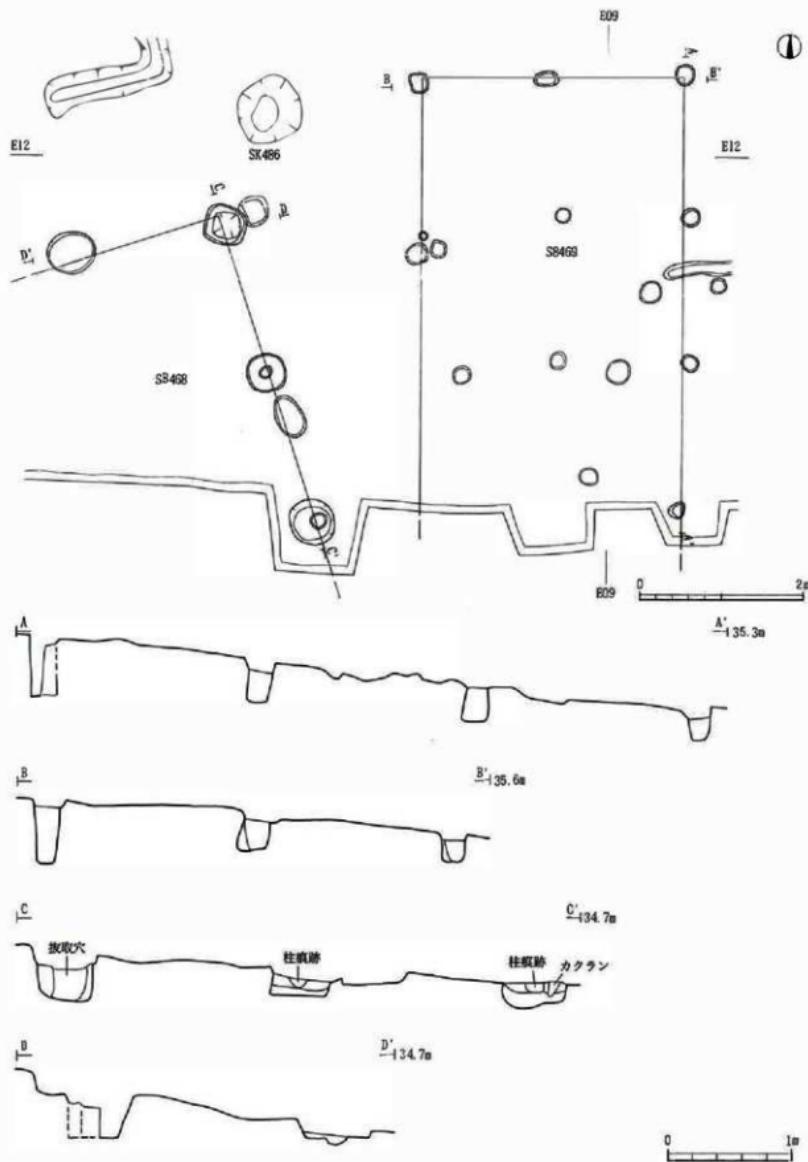
第28図 SB467掘立柱建物跡

SB468掘立柱建物跡

東西トレンチ西側に位置し、地山上面で検出した。また西側部分は削平を受けていることや、南側部分は調査区外に伸びているため、東西柱列1間、南北柱列2間を確認したのみである。柱穴は径44~60cmの円形であり、深さは44cm残存している。柱は北東隅柱を含む北辺で抜かれており、それ以外の柱穴で柱痕跡を確認した。方向は東側柱列でN-17°-Wである。東側の柱間は北より、2.0m、1.9mで、北側の柱間は1.8mである。遺物は出土していない。

SB469掘立柱建物跡

東西トレンチ中央部に位置し、地山上面で検出した東西2間、南北3間以上の南北棟建物跡である。南西側の柱穴は削平を受けたことにより失われている。SI463と重複しているが、直接的な切り合い関係がないため新旧関係は不明である。柱穴は径約22cmの円形であり、深さは50cm残存している。柱はすべて抜き取られている。方向は東側柱列でN-1°-Eである。東側の柱間は北より1.7m、1.6m、1.8mであり、北側の柱間は東より1.8m、1.5mである。遺物は出土していない。

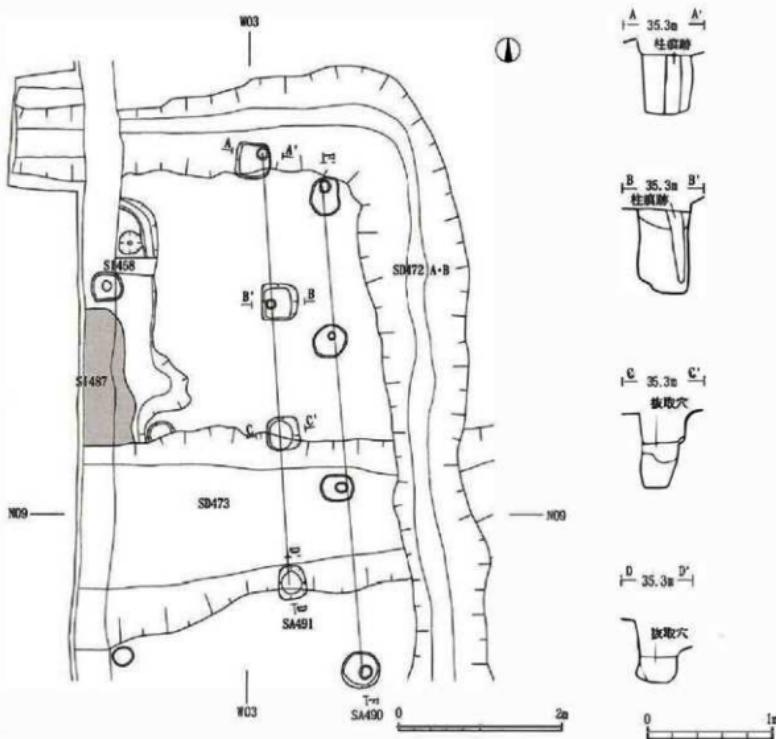


SA490A・B柱列跡

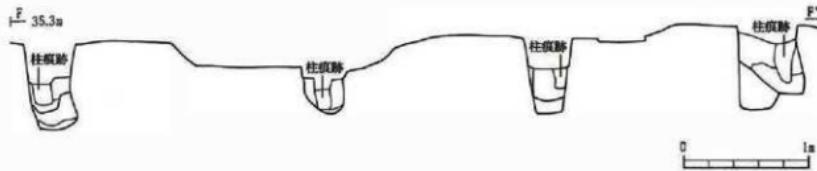
南北トレンチ中央部に位置し、II層上面で検出した。SD473と重複しており、これより新しい。同位置で2時期の変遷があり、A期の柱は新しい掘り方によって抜き取られている。B期のすべてに柱痕跡を確認した。B期の柱穴は円形で、規模は径約32~47cmである。柱痕跡は径10~16cmである。総長は5.9mで、柱間は北から1.8m、1.9m、2.3mである。方向はN-5°-Wである。遺物は出土していない。

SA491柱列跡

南北トレンチ中央部に位置し、地山上面で検出した。SD472、SD473と重複しており、これらより古い。北側2つの柱穴で柱痕跡を確認した。柱穴の規模は、43cm~45cmで、柱痕跡は12cm~16cmである。総長さは5.2mであり、柱間は北から1.8m、1.5m、1.9mである。方向はN-5°-Wである。遺物は土師器杯・甕が出土している。



第30図 SA490A・B柱列跡、SA491柱列跡



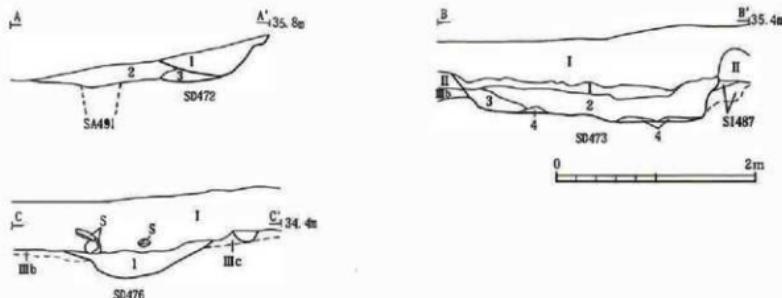
第31図 SA490A-B柱列跡柱穴断面

SD472A-B溝跡

南北トレンチ中央部に位置し、II層上面で検出した。SD473、SA490、SA491と重複しており、これらより新しい。ほぼ同位置で2時期確認できた。西端は調査区外に延びており、南端は沢状の落ち込みによって壊されている。確認した長さは約12mである。いずれの時期も東西方向から南北方向に大きく屈曲している。規模は新しいもので東西に約4.6m、南北に約7.8m延びている。幅は42cm～1.1mで、深さは5～46cmである。方向は南北方向でN-3°-W、東西方向でW-5°-Nである。底面はコーナー部分が最も高く、南と西に向かって傾斜している。南北の比高差は33cmであり、東西の比高差は31cmである。埋土は自然堆積土である。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕、無軸陶器甕、磁器碗が出土している。

SD473溝跡

南北トレンチ中央部に位置し、II層上面で検出した。SI458、SB466、SD472、SA490、SA491と重複しており、SD472、SA490より古く、SI458、SB466、SA491より新しい。幅は1.3～2.7mで東から西に向かって広がっている。深さは38～61cmである。両端とも調査区外に延びており、確認した長さは7.1mである。方向はE-7°-Nである。底面は西に向かって傾斜しており、その比高差は66cmである。埋土は自然堆積土である。遺物は、土師器杯・甕・高台付杯、須恵器杯・甕・瓶、平瓦、無軸陶器甕が出土している。

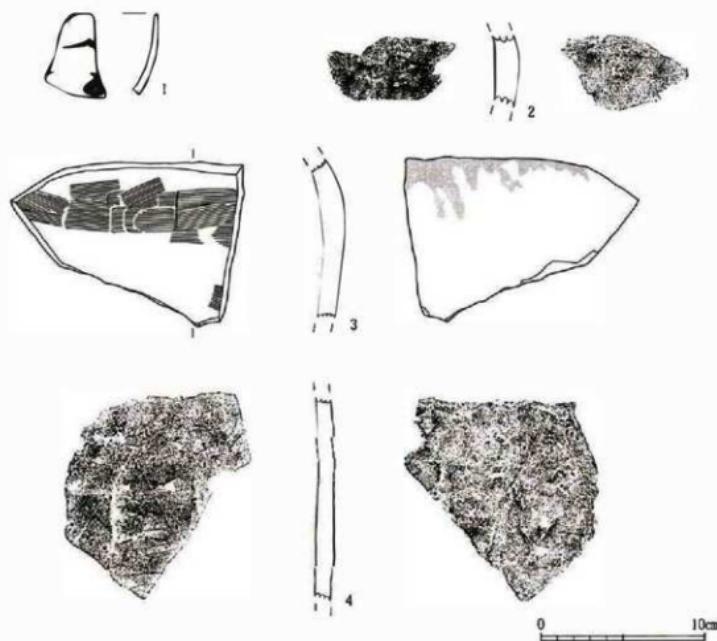


測標	地	地質・土性	特徴
SD472A	1	IDYR3/4細粒褐色土	
	2	7.5YR3/4細粒褐色土	地山駆を多く含む
SD472B	3	7.5VIM/6細粒褐色土	地山駆を多く含む
SD473	1	IDYR6/4c-5c黄褐色駆土	
	2	IDYR5/4c-4c-5c黄褐色駆土	
	3	IDYR3/4細粒褐色土	
	4	IDYR5/3c-4c黄褐色駆土	
SD476	1	IDYR4/6褐色土	地山ブロックを小量含む

第32図 SD472A-B溝跡、SD473溝跡、SD476溝跡断面

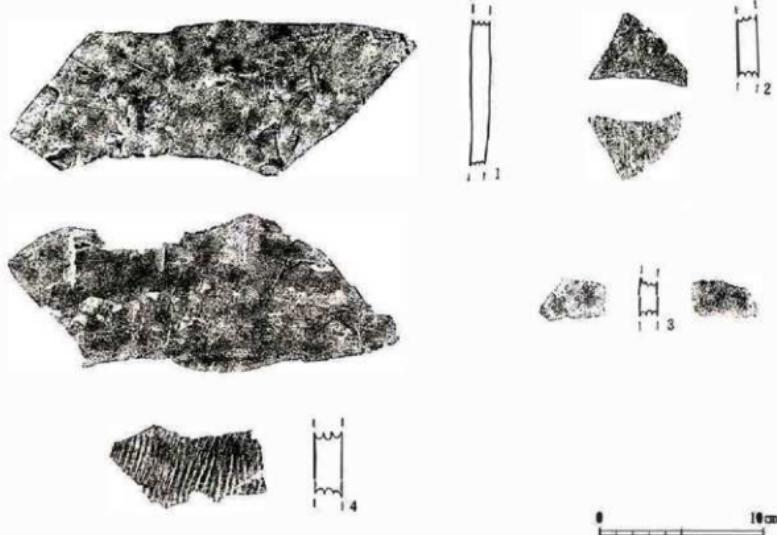
SD476溝跡

南北トレンチ南半部に位置し、III b層上面で検出した。SI460と重複しておりそれより新しい。平面形は東から西に向かって幅が広がっている。両端とも調査区外に延びており確認した長さは7.4mである。幅は1.0～2.7mで、深さは19～61cmを計る。方向はE-4°-Nである。底面は西に向かって傾斜しており、その比高差は1.6mである。埋土は自然堆積土である。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕・瓶、平瓦、丸瓦、天目茶碗、無軸陶器甕が出土している。



名	遺構	層位	断片	特徴	特徴	参考	年間回数	登録番号
1	SD472A	1-1	縦切	縦切	【外面文様】不明【内面文様】ナシ	縦切	回数5-3	R-156
2	SD472A	1-1	無	無	【内面】ロクロナデ	-	-	R-89
3	SD473	1-2	縦切	縦切	【内面】ナデ、自然模【外面】ヘラナデ	-	回数5-1	R-91
4	SD473	1-2	無	無	【内面】ロクロナデ	-	回数5-2	R-87

第33図 SD472A-B溝跡、SD473溝跡出土遺物

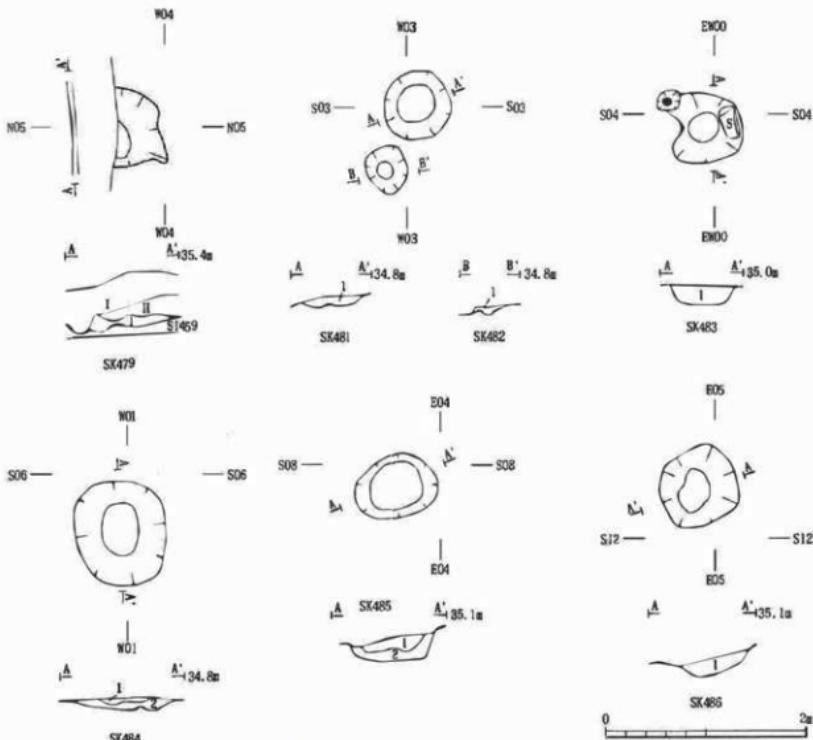


No.	遺物	層段	地質	面積	特徴	参考	写真番号	登録番号
1	SD473	1-2	無鉛陶器	便	【内外面】ロクロナデ	-	R-90	
2	SD473	1-3	無鉛陶器	便	【内外面】ロクロナデ	-	R-48	
3	SD476	1-1	無鉛陶器	便	【外底】平行タスキ【内面】ナデ	-	R-135	
4	SD476	1-1	無鉛陶器	便	【外底】ナデ	-	R-140	

第34図 SD473溝跡、SD476溝跡出土遺物

SK479土壤

南北トレンチ中央部に位置し、S1459埋土上面で検出した。西側は調査区外に延びているため全体を確認できなかったが、平面形は不整形と考えられる。規模は80cm×44cm以上、深さは9cmである。壁は緩やかに立ち上がっている。埋土は1層で自然堆積土である。遺物は土師器壺、把手付土器が出土している。把手付土器は非ロクロ調整である。把手部は中空で手持ちヘラケズリ調整が施されており、杯部は内外面ともナデ調整が加えられている。把手部と杯部の接合部は、粘土を貼り付けた後ナデ調整で仕上げている。体部下半と底部は摩滅しており調整等は不明だが、2次加熱を受け赤褐色に器面が変色している。



編號	地	色調 土性	特徴
SK479	1	7.5YR4/4褐色土	焼土ブロック、炭化物を多く含む。
SK481	1	10YR2/4褐色土	地山駆、炭化物を少く含む。
SK482	1	10YR2/4褐色土	地山駆、炭化物を少く含む。
SK483	1	7.5YR3/4褐色土	焼土多量に含む。炭化物を少く含む。
SK484	1	10YR4/5褐色土	地山駆を少く含む。炭化物を少く含む。
	2	10YR4/5褐色土	地山駆を少く含む。炭化物を多量に含む。
SK485	1	10YR4/5褐色土	地山駆ブロックを含む。
	2	10YR4/5褐色土	地山駆、ブロックを含む。
SK486	1	10YR4/5褐色土	炭化物少く、地山駆を少く含む。

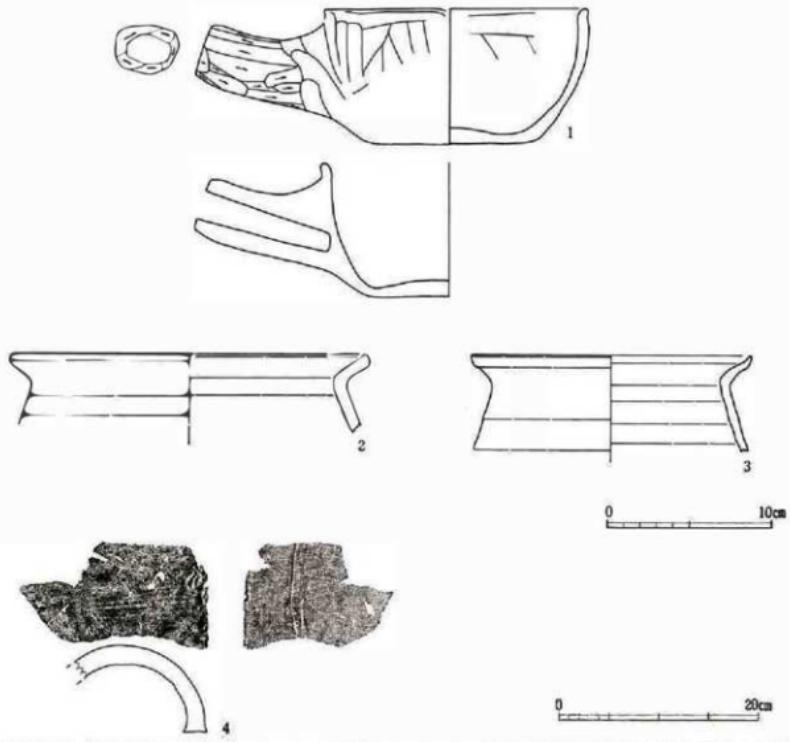
第35図 SK479、SK481～486土壤

SK481土壤

南北トレンチ南半部に位置し、地山上面で検出した。平面形は円形で、規模は長径68cm、短径65cm、深さ16cmである。壁は緩やかに立ち上がっており、埋土は1層で自然堆積土である。遺物は土師器杯・壺、須恵器壺・瓶が出土している。

SK482土壤

南北トレンチ南半部に位置し、地山上面で検出した。平面形は円形で、規模は長径46cm、短径39cm、深さ10cmである。壁は緩やかに立ち上がっており、埋土は1層で自然堆積土である。遺物は土師器杯・壺、須恵器杯・壺、灰釉陶器皿が出土している。



第36図 SK479、SK483土壤出土遺物

SK483土壤

南北トレンチ南半部に位置し、SI460埋土上面で検出した。SI460と重複しており、これより新しい。また、南西隅に焼土の塊、東側面には火を受けた石が埋められている。平面形は円形で、規模は長径70cm、短径61cm、深さ25cmである。壁はほぼ直に立ち上がっている。埋土は1層で人為堆積土と思われる。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕、丸瓦II類が出土している。

SK484土壤

南北トレンチ南半部に位置し、地山上面で検出した。SB467と重複しており、これより新しい。平面形は橢円形で、規模は長径105cm、短径90cm、深さ21cmである。壁は緩やかに立ち上がっている。埋土は2層で、自然堆積土である。遺物は上層から土師器甕が出土している。

SK485土壙

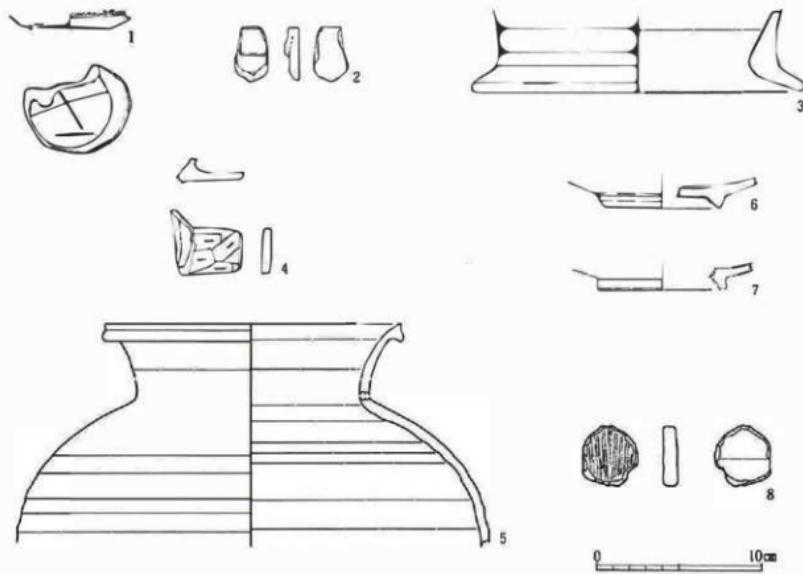
南北トレンチ南側に位置し、地山上面で検出した。平面形は橢円形で、規模は長径80cm、短径62cmである。壁は緩やかに立ち上がっている。埋土は4層でいずれも自然堆積である。遺物は出土していない。

SK486土壙

東西トレンチ西側に位置し、地山上面で検出した。平面形は方形である。壁は緩やかに立ち上がっている。規模は、南北74cm東西78cm、深さは16cm～34cmである。埋土は1層で自然堆積土である。遺物は土師器甕、須恵器杯が出土している。

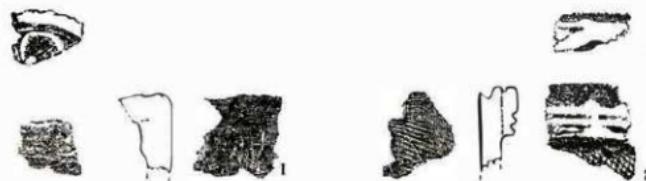
遺構外出土の遺物

堆積層からは土師器、須恵器、灰釉陶器、綠釉陶器、陶磁器、青磁、丸瓦、平瓦、砥石、古銭が出土している。

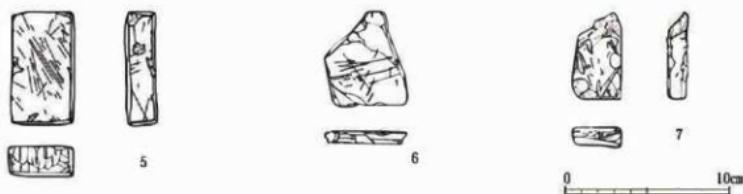


No.	部位	直径	形態	特徴	番号	口径	底径	高さ	刀葉切版	鑄錠番号
1	口付	土師罐	杯	【外表面】漆絵 【内表面】ヘラミガキ+褐色粉薙	底部ヘラガキ	—	5.0	—	—	R-44
2	I 棒	土師罐	甕 or 瓶	【内外面】コロナデ	折り返し口群	—	—	—	—	R-156
3	I 棒	土師罐	瓶	【内外面】コロナデ	—	—	(29.0)	—	—	R-155
4	I 棒	漆器類	豆耳杯	【外表面】ケズリ【内面】ロクロナデ	—	—	—	—	—	R-147
5	I 棒	漆器類	甕	【内外面】ロクロナデ	(17.9)	—	—	—	—	R-56
6	I 棒	瓦陶陶器	皿	【内外面】ロクロナデ、三日月溝台	—	(7.1)	—	—	—	R-101
7	I 棒	器物陶器	皿	【内外面】ロクロナデ、輪底台	—	(7.9)	—	—	—	R-102
8	I 棒	円盤状土製品	中世陶器すり鉢	—	—	—	—	—	—	R-103
9	I 棒	瓦陶陶器	文鏡	—	—	—	—	—	—	R-105
10	I 棒	瓦陶陶器	文鏡	—	—	—	—	—	—	R-106

第37図 遺構外出土遺物(1)



0 20cm



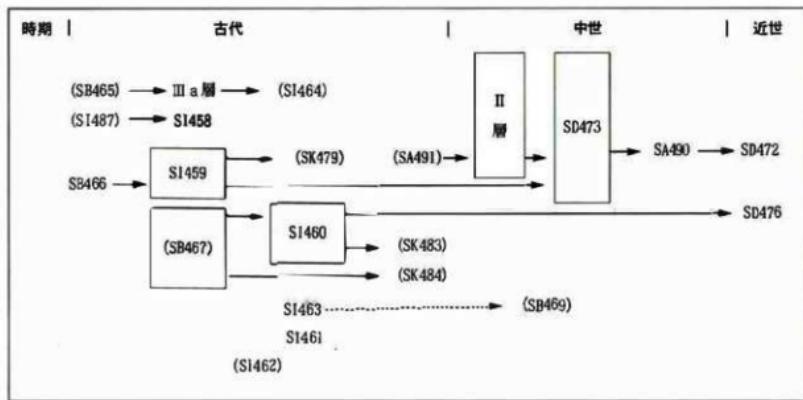
0 10cm

No.	器種	種別	特徴	参考	写真図版	登録番号
1	土器	片平瓦	縁外縫斜文		—	R-37
2	土器	片平瓦	縁外縫		—	R-68
3	土器	平瓦	〔凹面〕布目→ナデ〔凸面〕	日暮一・a面、刻印「物」	図版5-6	R-64
4	土器	平瓦	〔凹面〕布目→ナデ〔凸面〕	日暮一・b面、刻印「物」	図版5-7	R-66
5	土器	砾石	〔石材〕凝灰岩		—	R-109
6	土器	砾石	〔石材〕熱鉱岩		—	R-111
7	土器	砾石	〔石材〕凝灰岩		—	R-110

第38図 遺構外出土遺跡(2)

4まとめ

今回の調査では、竪穴住居跡7軒、掘立柱建物跡5棟、溝跡3条、土壙6基、柱列跡2条を検出している。



以下、時代ごとに重複関係を整理しながら年代の検討をおこなう。

<古代>

今回の調査における出土遺物を見ると、土師器のほとんどはロクロ調整であることと、須恵系土器が一切出土していないことが指摘できる。このことから、今回検出した古代の遺構はおよそ9世紀代を中心とするものと考えられる。

SI458とSI487は重複関係があり、SI487→SI458の変遷が確認できた。SI458のカマドから出土した土師器甕は、外面をタタキ成形の後ロクロ調整をしている。近年、多賀城跡の調査において出土土器の変遷の詳細な検討が行われている。このような特徴を持つ土器は、8世紀末から9世紀前葉頃とされる第62次調査第Ⅰ群土器(註1)と9世紀第3四半期とされる五万崎地区のSK2272出土土器群(註2)の中に見られる。これら二つの土器群は天長9(832)年以降に使用・廃棄された第60次調査のSE2101B第III層出土土器群を間に跨る前後する。このことから、SI458は8世紀末から9世紀第3四半期と考えられる。

SI459、SB466、SK479は重複関係があり、SB466→SI459→SK479の変遷が確認できた。SI459の壁柱穴の抜き取り穴からは2つの土師器杯が共伴して出土している。ひとつは手持ちヘラ削り再調整のものであり、ひとつは回転ヘラケズリ再調整のものである。このような特徴から下限は9世紀中葉と考えられる。また、これより古いSB466から政庁第Ⅲ期にともなう平瓦II B-b類が礎盤として使用されていることから、8世紀末が上限と考えられる。掘立柱建物跡の耐用年数などを考慮すれば、SB466は8世紀末以降、SI459は9世紀前半～中葉と考えられる。なお、SK479からは非ロクロ調整の把手付土器が出土しているが、他に共伴する遺物が出土していないため9世紀後葉以降と考えられる。把手付土器は、底径が大きい杯に

外面にヘラケズリ調整を施した中空の把手がつく。このような土器は、鉄鍋を模倣したものと考えられ、福島県本宮町関畠遺跡や青森県藤原常平遺跡などから同様のものが出土している。また、把手付の鉄鍋は多賀城跡第14次調査324号住居跡や秋田城跡から出土している。一方、このような把手付鉄鍋の模倣は古代末の北東北において在地化し盛行する。三浦氏の編年によると把手付土器はⅢ-2期の土器群（10世紀末から11世紀前葉）から出現しIV期（11世紀中葉から12世紀前葉）をとおして土器組成の中で一定の位置をしめる（註3）。今回出土した土器は胎土に白針状物質を含むことから在地産の可能性が高いもので、また、北東北で一般的に出土するものとはその形態に相違点が認められる。

SI460とSB467は重複関係があり、SB467→SI460の変遷が確認できた。SI460に伴う土壤からは回転ヘラ切り無調整の須恵器杯、周溝からは平瓦のII B-b類が出土している。また埋土からは底径が口径に比してやや小さい回転糸切り無調整の須恵器杯が出土しており、SI460の年代は9世紀後半以降と考えられる。

SI461のカマド下の周溝からは回転ヘラケズリ再調整の土師器杯が出土している。出土状況からカマド構築以前のものである。また、床面から回転糸切り無調整の須恵器杯が出土している。これらの遺物の特徴より、SI461の年代は9世紀中葉と考えられる。

SI463の周溝からは底径が口径に比してやや小さく、体部が直線的に立ち上がる須恵器杯が出土している。このことから、SI463の年代は9世紀後半と考えられる。

そのほか、SI464、SB465、SB468からはまとまった遺物が出土していないため出土遺物からその年代を特定できない。ただし、その方向についてみると、年代が明らかなSB467、SB466とほぼ一致することから、およそ9世紀代と考えられる。

＜中世＞

中世の遺構と考えられるのはSA490、SA491、SD473である。これらは重複関係よりSA491→SD473→SA490の変遷が確認できた。SD473からは無軸陶器座の体部が出土している。その胎土の特徴から東海産の可能性が考えられる。このことから、SD473の年代はおよそ中世と考えられ、これより新しいSA490も同様の時期に推定できる。

＜近世＞

近世の遺構と考えられるのは、SD472、SD476である。SD472から出土した磁器碗は18世紀頃で、また、SD476からは17世紀頃の天目茶碗の破片が出土している。

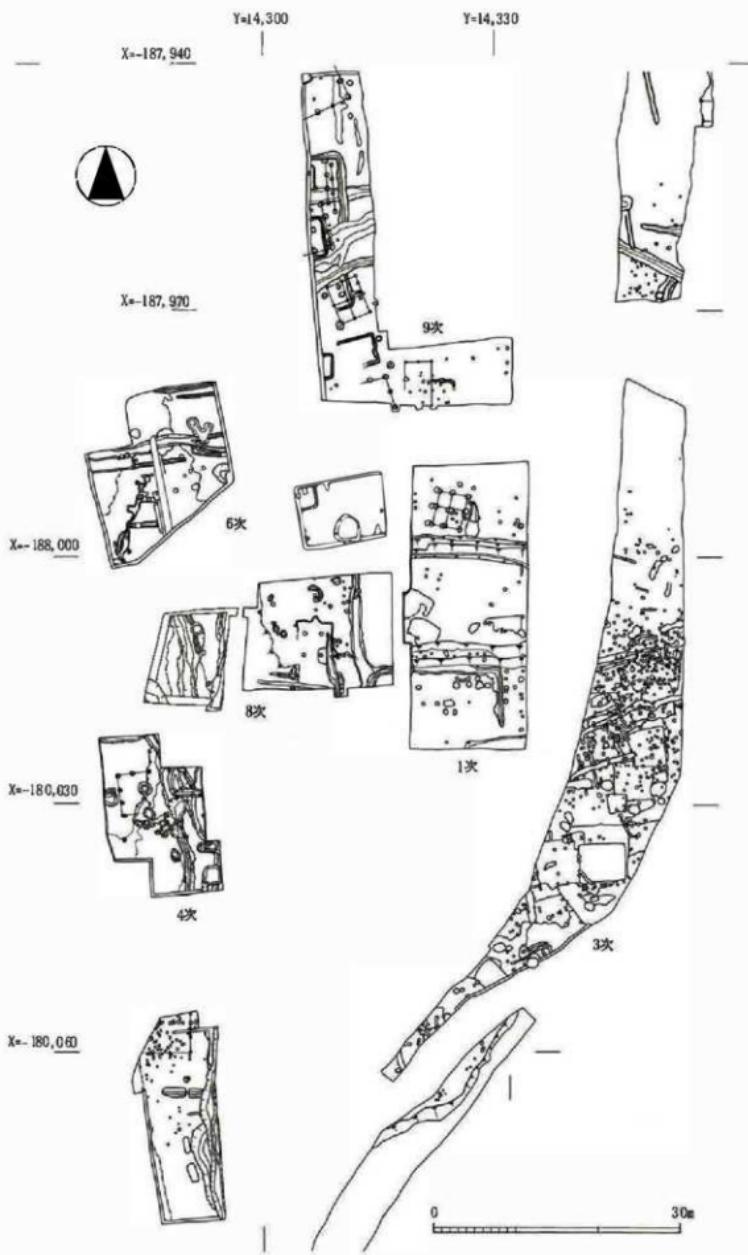
なお、SB469は方向がほぼ座標北を指すことや掘り方が小さいことなどから、古代の掘立柱建物跡とは違った様相を示す。遺物が出土してないため明確な年代は不明であるが、およそ中世以降と考えておく。

[註]

（註1）宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報1992』

（註2）宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報1994』

（註3）三浦圭介「日本海北部における古代後半から中世にかけての土器様相」シンポジウム『土器からみた中世社会の成立』1990



第39図 本次調査区と周辺調査区の遺構配置図

写真図版 1



南北トレンチ遺構完掘状況

(北から)



東西トレンチ遺構完掘状況

(西から)



SI459竪穴住居完掘状況

(南から)



写真図版 2

SI460竪穴住居跡

SB467掘立柱建物跡完掘状況

(西から)



SI461竪穴住居跡完掘状況

(西から)



SI462竪穴住居跡完掘状況

(西から)

写真図版 3



SB465掘立柱建物跡完掘状況

(北から)



SB466掘立柱建物跡完掘状況

(東から)



SB468掘立柱建物跡完掘状況

(南から)



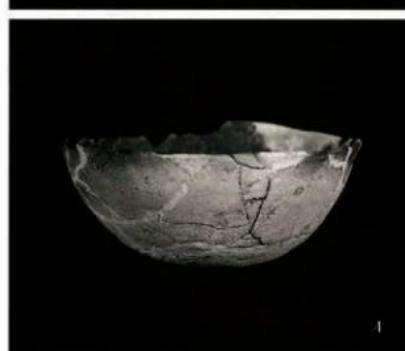
1



2



3



4



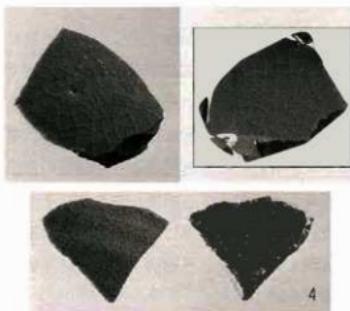
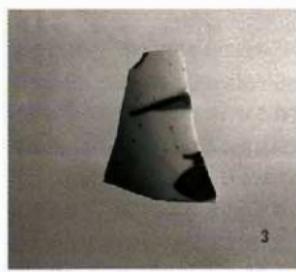
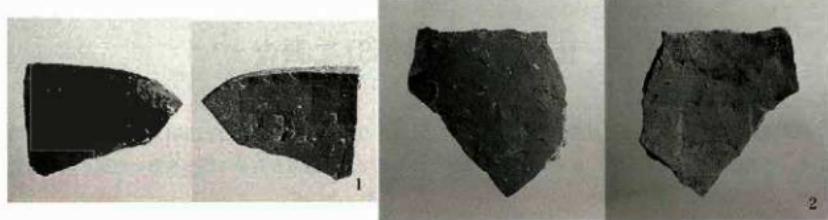
5



6

写真図版 4

1～3 SI459竪穴住居跡 4、5 SI461竪穴住居跡 6 SK479土壙



写真図版 5

1、2 SD473溝跡 3 SD472溝跡 4 1層（青磁） 5 SI461竪穴住居跡 6、7 III層

II 高崎遺跡第31次調査

1. 高崎遺跡の概要

高崎遺跡は、特別史跡多賀城廃寺跡を取り巻くようにあり、東西約1.2km、南北約1.1kmの広さを有している。遺跡が立地する丘陵は、松島丘陵から派生したもので、塩竈市方向から西へ次第に標高を減じ多賀城市北部で沖積地に接している。

本遺跡は古墳時代から近世にかけての複合遺跡であり、特に遺跡の西半部において奈良・平安時代の遺構・遺物が頗るに見られる。特に多賀城廃寺周辺では鉄製匙、灰釉陶器の淨瓶、多量の燈明皿などが出土しており、これらは仏教儀式に使用されたものと考えられている。

2. 調査に至る経緯と経過

本件については、個人住宅建築計画に係るものである。当該区周辺では3回にわたって調査を実施していたが、これらの調査では、遺構の分布は希薄であったことから不明な部分も多かった。計画では地山まで削り取る工法のため、当初は確認調査を行い、遺構が発見された場合には事前調査として調査を実施することにした。3月10日に地権者より承諾書の提出を受け、確認調査に入る。3月15日溝・土壌等を発見し、事前調査として対応する必要が生じた。その後、日程等の調整を行い、4月11日から調査に着手した。以下、調査経過について簡単に記述する。13日平面図作成用の基準点を設定する。溝、土壌の他、新たに性格不明遺構を発見する。各遺構を掘り下げ平面図を作成。23日全景写真撮影、25日地形測量及び土層注記を行い調査を終了した。

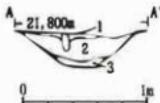
3. 調査成果

今回の調査によって溝2条、土壌2基、性格不明遺構1基を発見した。これらの遺構はすべて地山上面で検出した。遺構間の重複関係はなかった。

(1) 発見遺構

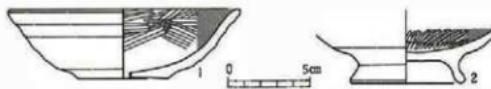
SD1490溝跡

調査区北側で検出し、蛇行しながら東西方向に延びる溝である。確認できる長さは約17m以上である。規模は上幅0.8~1.0m、下幅20~50cm、深さ26~32cmである。底面は幾分凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がっている。埋土は3層に分層され、いずれの層もしまりに欠けている。遺物は土師器杯・高台付杯、須恵器杯が出土している。遺物はいずれもロクロ調整が施されたもので、土師器杯は底部回転糸切り無調整である。



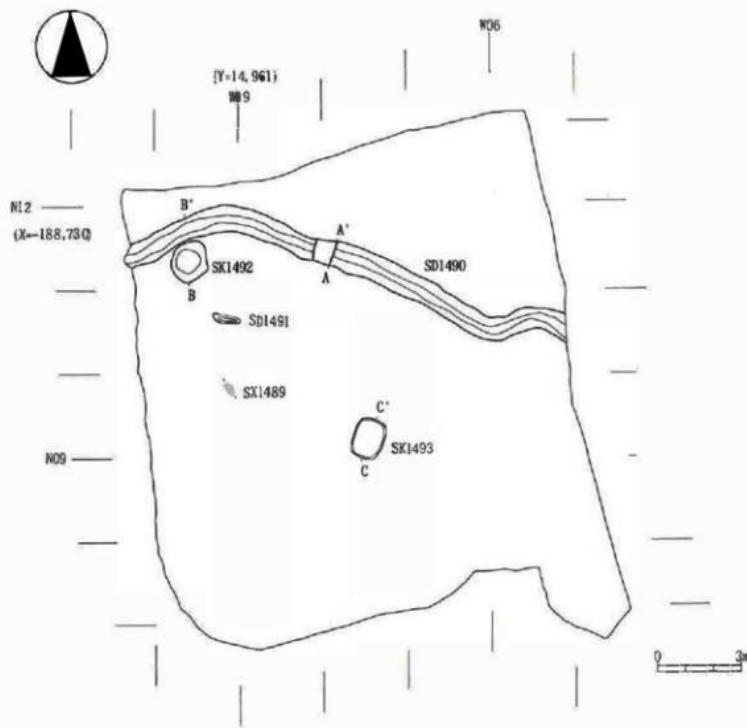
No.	土色・土性	参考
1	IDYR2/4褐色色シルト	IDYR4/4褐色土を斑状に含む
2	IDYR4/4褐色色シルト	
3	IDYR4/6褐色色シルト	鐵底盤プロックを含む

第1図 SD1490断面図



No.	地質	層位	特徴	口径	底径	高さ	空缺番号
1	土師器・杯	1層	[外観] ロクロナギ [内面] ヘラミガキ・褐色地塊	(14.2)	(5.5)	(4.25)	R5
3	土師器・高台付杯	1層	[外観] ロクロナギ [内面] ヘラミガキ・褐色地塊		6.95		R6

第2図 SD1490出土遺物



第3図 遺構全体図

SD1491溝跡

調査区西側SK1492とSX1489の間に位置する。長さ約1mほどの東西方向の小溝である。規模は上幅20～30cm、下幅7～10cm、深さ10cmである。底面は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。埋土は単層である。遺物は土師器杯2個が一部重なり合った状態で出土しており、いずれも回転糸切り無調整である。



No.	用意	測位	特徴	口径	底径	高さ	登録番号
1	土師器・杯	I帯	[外縁] ロクロナデ [内縁] ヘラミガモ・渦巻地模	15.9	6.4	5.4	83
2	土師器・M	I帯	[外縁] ロクロナデ [内縁] ヘラミガモ・渦巻地模	(3.4)	(4.7)	4.5	84

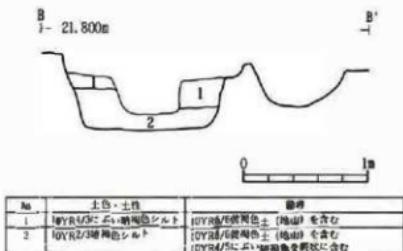
第4図 SD1491出土遺物

SK1492土壤

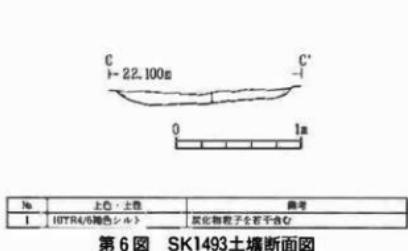
調査区北西側で検出し、中央から北側にかけて擾乱を受けている。平面形は楕円形を呈し、長軸1.5m、短軸90cm、深さは60cmである。底面は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。埋土は2層に分層され、人為的に埋め戻されている。遺物は丸瓦が出土している。

SK1493土壤

調査区中央部の南側で検出した。平面形を呈し、長軸1.4m、短軸1.28m、深さ10cmである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は単層である。遺物は出土していない。



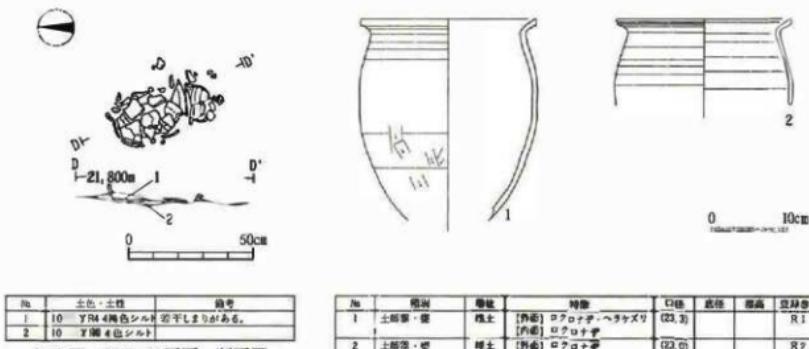
第5図 SK1492土壤・SD1490溝跡断面図



第6図 SK1493土壤断面図

SX1489性格不明遺構

調査区西側で検出し、遺構は木の根の擾乱、削平のため残存状況が悪い。土師器長胴甌を南北45cm、東西30cmの範囲につぶれた状態で検出した。方向はN-27°-Wで、口縁部を南に向けていた。甌の口縁部付近には、別個体の甌も出土している。甌の下には掘り方埋土を確認できた。遺物はいずれもロクロ調整である。



遺構外出土遺物

表土から土師器杯・甌、須恵器杯・甌、須恵系土器杯、平瓦等が出土している。



第9図 表土出土遺物

4.まとめ

今回発見された遺構は溝2条、土壙2基、性格不明遺構1基である。これらの遺構の年代については、出土遺物の特徴から9世紀後葉～10世紀前半頃と考えられる。SX1489性格不明遺構については壺の下に掘り方埋土を確認したことより、上部にも掘り方があった可能性がある。このことから、確証にかけるが人為的に埋設されたと考えておきたい。



調査区全景（北西から）



SX1489検出状況（北西から）

高崎遺跡第31次調査におけるリン・カルシウム分析

株式会社古環境研究所

1.はじめに

土壤中に含まれるリン酸やカルシウムの起源としては、土壤の母材、動物遺体、植物遺体などがあり、未耕地の土壤中におけるリン酸含量は通常0.1~0.5%程度、耕地土壤でリン酸肥料が投入された場合は1.0%程度である。農耕地では施肥による影響が大きく、目的とする試料の分析結果のみから遺構・遺物内における生物遺体の存在を確認するのは困難である。このため、比較試料（遺物・遺構外の試料）との対比を行う必要がある。ここでは、SX1489内部の埋土について分析を行い、人骨などの生物遺体の有無について検討を試みた。

2. 試料

分析試料は、SX1489内部の埋土2点および比較試料として採取された遺構外土壤1点の計3点である。

3. 分析方法

エネルギー分散型蛍光X線分析システム（日本電子製、JSX320I）を用いて、元素の同定およびファンダメンタルパラメータ法（PF法）による定量分析を行った。試料の処理法は次のとおりである。

1) 試料を絶乾（105°C・24時間）

2) メノウ製乳鉢を用いて試料を粉碎

3) 試料を塩化ビニール製リング枠に入れ、圧力15t/Uでプレスして鉛剤試料を作成

4) 測定時間300秒、照射径20mm、電圧30keV、試料室内真空の条件で測定

なお、X線発生部の管球はロジウム（Rh）ターゲット、ベリリウム（Be）窓、X線検出器はSi（Li）半導体検出器である。

4. 分析結果

各元素の定量分析結果（wt %）を表1に示し、リン酸（ P_2O_5 ）とカルシウム（CaO）の含量を図1に示す。

5. 考察

SX1489内では、リン酸含量が0.49%と0.64%（平均0.57%）であり、遺構外の土壤の0.37%と比較して明らかに高い値である。また、カルシウム含量も0.77%と0.79%（平均0.78%）であり、遺構外の土壤の0.24%と比較して明らかに高い値である。

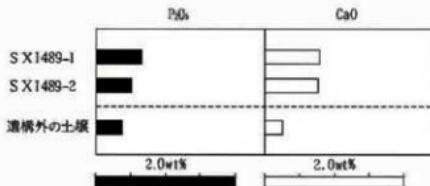
以上のことから、SX1489内部にはリン酸やカルシウムを多く含む何らかの生物遺体が存在していた可能性が考えられる。ただし、本遺構の上位層について分析が行われていないことから、後代の農耕に伴う施肥の影響も否定できない。

文献

竹迫龍（1993）リン分析法、日本第四紀学会編、四紀試料分析法、2. 研究対象別分析法、東京大学出版会、p.38-45.

表1 高峰遺跡第31次調査における蛍光X線分析結果
単位: wt (%)

原子番号 化学式	地点・資料		遺構外土壤
	1	2	
11 Na ₂ O	0.99	1.17	0.32
12 MgO	0.73	0.73	0.91
13 Al ₂ O ₃	17.03	16.96	18.40
14 SiO ₂	72.26	72.07	70.31
15 P ₂ O ₅	0.64	0.49	0.37
16 SO ₃		0.06	
19 K ₂ O	1.07	1.08	1.15
20 CaO	0.79	0.77	0.24
22 TiO ₂	1.04	1.02	1.09
23 V ₂ O ₃	0.01	0.01	0.01
25 MnO	0.06	0.06	0.01
26 Fe ₂ O ₃	5.31	5.54	7.13
38 SrO	0.02	0.01	0.01
40 ZrO ₂	0.05	0.04	0.04



III. 高崎遺跡第33次調査

1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設に係る事前調査として実施した。開発対象地域の周辺ではこれまで、第13次・20次・24次・28次・31次の5回調査が行われてきており、古代およびそれ以降とされている遺構が検出されている。今回の調査区に直接連続する遺構としては、第24次・28次調査で発見されていた土壙とそれに伴う溝がある。これらの遺構については、年代、性格等が不明瞭であり、これを究明することが課題でもあった。調査は6月20日に重機を使用して盛土・表土の除去を行い、同26日には作業員を動員して遺構検出作業に入った。調査区は開発区域の形状を考慮して、便宜上東側をA区、西側をB区とした。検出作業はA区から開始し、B区へと進み7月3日にはほぼ遺構の概要が把握された。A区では堆積層がみられただけで、遺構は検出されなかった。一方B区では、南側に隣接する第24次調査区で発見されていたSX1411土壙それに伴うSD1413溝跡に連続するとみられるプランが検出された。SX1412土壙は削平をうけて残存していなかった。また、新たにSX1411土壙の西側に南北溝が伴うことや、それに接続して東西溝も存在することが明らかになった。7月4日からは、これらの遺構の掘り込みを開始し、並行しながら測量の基準杭打ち、平面・断面図作成、写真撮影を随時行っていった。7月28日にはほぼこれらの作業が終了した。また、これ以降B区北半の堆積層を除去したところ、土器焼成遺構1基を検出した。最後に地形測量図を作成して調査が完了したのは8月2日である。

2. 調査成果

(1) 基本層序と出土遺物

ここではA区とB区に分けて説明する。まず、A区では表土層(第I層)除去後、平面的にII・III層の分布が確認された。各層の特徴と出土遺物は以下の通りである。

I層：表土。層厚は20cm前後。遺物は須恵器片4点が出土している。

II層：調査区北半部の中央付近に分布する。褐灰色のシルトで、層厚は最大で10cmを計る。掘り上げると不整形の溝状のくぼみとなる。遺物は土師器2点、須恵系土器1点、須恵器甕1点が出土しているがいずれも小破片である。

III層：調査区の東半部、II層の東側に分布する。にぶい黄橙色のシルトで、層厚は最大で10cmを計る。

遺物は土師器片2点、須恵器片27点が出土している

次にB区では、調査区の北半部を中心に堆積層が確認されている。いずれの層も地形の傾斜に沿って堆積したものと思われる。なお、堆積範囲が狭い範囲で、他の層と直接的な上下関係が不明な層はアルファベットで表記した。

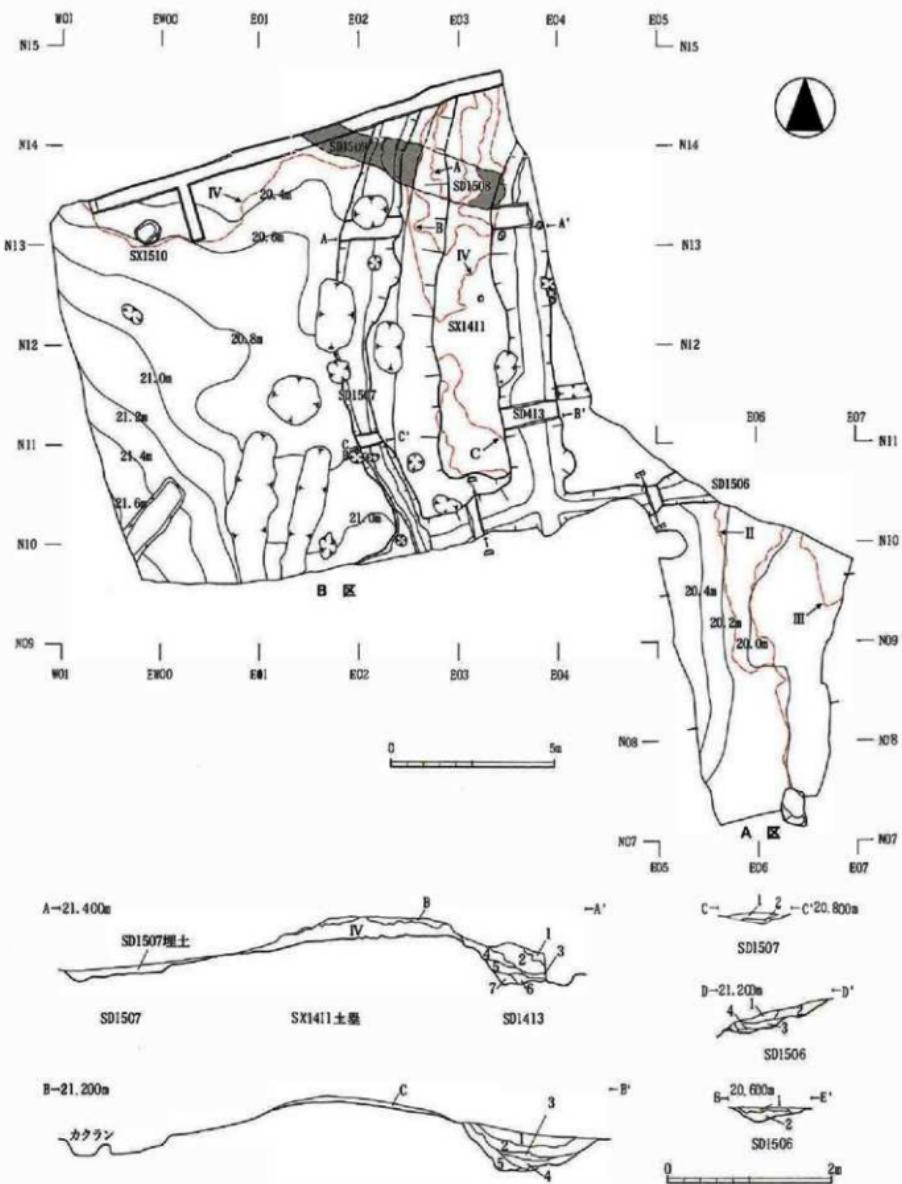
Ia層：現代の盛土層。層厚は1.3m前後。

Ib層：〃 表土層。層厚は10cm前後。遺物は須恵器片5点、石器2点が出土している。

IIa層：調査区北西隅付近に部分的にみられる。灰黄褐色の粘土質シルトで、層厚は10cm前後。

IIb層：IIa層の東側に部分的にみられる。褐灰色のシルトで、層厚は5cm前後。

III層：調査区の北壁付近にみられ、にぶい黄色のシルトで、層厚は20cm前後。



第1図 遺構全体図と断面図

IV 層：調査区の北壁から北東隅付近にかけてみられる。褐灰色のシルトで、層厚は10cm～30cmを計る。遺物は縄文土器1点、須恵器17点、平瓦1点が出土しているがいずれも小破片である。

V 層：地山

- A 層：調査区の北東隅付近でのみ確認された。にぶい黄褐色のシルトで、層厚は5～10cmを計る。土師器片8点が出土している。
- B 層：A層とほぼ同位置で、そのまま一回り大きくした分布範囲をとる。にぶい黄橙色の粘土質シルトで、黄灰色の粘土質シルトブロックが特徴的に混じる。層厚は5～10cmを計る。
- C 層：調査区の南東隅付近、S X1411土壌上にみられる。にぶい黄橙色のシルトで、層厚は5cm前後。

(2)発見遺構と遺物

SX1411土壌

B区、東半付近に位置し、地山上面で検出した。東側にSD1413、南側にSD1506、西側にSD1507が伴う。SD1508と重複しており、これより新しい。長さは約12.5m以上、第24次調査区分も含めると約33m以上を検出している。方向は全体としては南北の方位をとるが、東側を囲むような緩い弧状を描く。幅は上端で1.4～2m、高さは90cmを計る。積土は北半に分布していたB層で、5～10cmの厚さがある。

SD1413溝跡

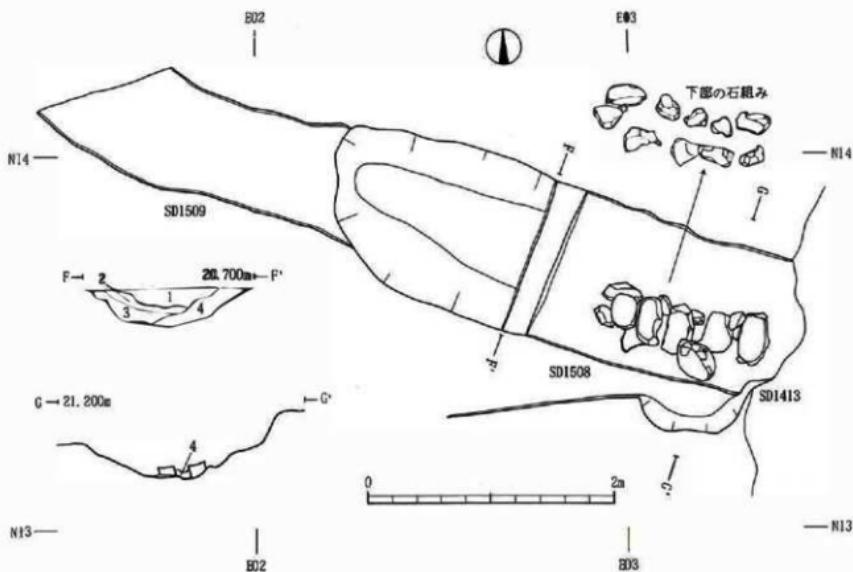
B区、東端付近に位置し、B層・C層上面、地山上面で検出した。重複関係はない。方向はほぼ南北に走るが、北端ではやや東に向きを変える。本溝跡は南側の第24次調査区すでに検出していたものであり、SD1506と十字に交わる。今回確認した長さは約10mで、幅1.2～1.8m、深さは約50cmを計る。底面は南から北へとゆるやかに傾斜している。埋土は大別すると3層に分けられ、下層は西側より堆積を開始している。いずれの層も自然堆積である。断面形は逆台形を呈し、底面にはやや凹凸がみられる。遺物は埋土中より土師器片4点、須恵器片10点、平瓦片3点が出土した。

SD1506溝跡

B区、南端付近に位置し、地山上面で検出した。重複関係はない。方向は東西方向に走るが、SD1413溝

名	土色	土性	備考
SD1413 (A-A'ライン)			
1	褐灰色(07YR4/1)	シルト	しまりなし。黄色地山を含む。
2	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	褐色粘土ブロックが混じる。
3	褐灰色(07YR8/1)	粘土	馬糞。
4	灰褐色(2.5YR6/2)	シルト	馬糞。かたくしまりあり。
5	黄褐色(2.5YR4/1)	シルト	黄色地山と小ブロック化粘土を含む。
6	黄褐色(2.5YR4/1)	粘土質シルト	黄色地山を含む。
7	黄褐色(2.5Y4/1)	※シルト	黄色地山に限る。しまりなし
SD1413 (B-B'ライン)			
1	褐灰色(07YR4/1)	シルト	A-A'ラインの1期に対応する。
2	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	馬糞。黄色地山を帶びる。
3	黄褐色(2.5YR6/1)	シルト	馬糞。黄色地山と、炭化物を含む。
4	褐灰色(07YR4/1)	粘土質シルト	上部が砂質、下部が粘土質。
5	にぶい黄褐色(10YR6/4)	粘土質シルト	地山をさむ。
SD1506 (C-C'ライン)			
1	黄褐色(2.5YR6/3)	粘土質シルト	地山を含む。しまりあり。
2	にぶい黄褐色(2.5YR6/3)	シルト	
SD1506 (D-D'ライン)			
3	褐灰色(07YR4/1)	シルト	SD1413の1期に対応する。
4	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	馬糞。地山を含む。
5	07YR5/2	シルト	地山を多く含む。
6	褐灰色(07YR8/1)	粘土質シルト	SD1413(B-B'ライン)の4期に対応。
SD1506 (E-E'ライン)			
1	褐灰色(10YR4/1)	シルト	SD1413の1期に対応。
2	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	D-D'ラインの3期に対応。

溝跡土層観察表

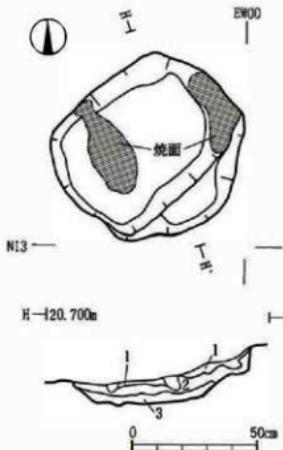


第2図 SD1508・1509遺跡平面図・断面図

の東側ではやや方向が南にずれる。確認できる長さは10.5mで、幅90cm(場所によっては1.25m以上)、深さ約20cmを計る。SD1413・SD1507と交差する。埋土はSD1413と共通した土壤が確認されている。底面は凹凸があり、壁は開きながら内湾ぎみに立ち上がる。遺物は埋土中より須恵器甕片11点、平瓦片3点が出土した。

SD1507溝跡

B区、ほぼ中央付近に位置し、Ⅲ層上面および地山上面で検出した。SD1508・1509と重複しており、これらより新しい。方向は南北に走るが、SD1413と同様の方向性をとる。確認できる長さは約13.7mで、幅は南半で80cm、北半で1.8m、深さ10~15cmを計る。埋土は2層に分層されるが、いずれも基本Ⅲ層に近似する。残存状況が非常に悪く、断面形態も一様ではない。遺物は埋土中より丸瓦片2点、平瓦片1点が出土した。



第3図 SX1510平面図・断面図

No.	土色	土性	説明
SX1508 (H-I-1'ライン)			
1	褐色(10YR5/3)	シルト	炭化物粒多量に含む。焼土粒若干混む。
2	灰褐色(10YR8/4)	シルト	鉄鉱石近くは黄色を帯びる。焼土粒若干混む。炭化物粒多量に含む。焼土粒若干混む。
3	黄褐色(2.5Y4/1)	シルト	炭化物粒少量に含む。焼土粒を含む。この層は一部薄い発達面にはみられない。

SD1508溝跡

B区、北東付近に位置し、B層に覆われIV層上面で検出した。SD1413・1507と重複しており、これらより古い。方向は、E-18°-Sである。確認された長さは約4mで、幅1.3m、深さ32cmを計る。埋土は4層に分層されるが、3・4層は石組みをえた際の裏込め土とみられる。1層についても人為的に埋め戻されている。底面はほぼ平坦で、断面形は緩やかなU字状を呈する。底面レベルは、東から西へ向かって傾斜する。遺物は埋土中より須恵器瓶1点、壺片1点が出土した。付属する施設としては、北半部分の底面上に、長さ約1.4mの石組列を検出した。組み方は幅10cmをおいて両側に割石を5個並べ、その上に20×30cm大の割石をのせたものである。底面に敷石はみられない。

SD1509溝跡

B区、北東隅付近に位置し、IV層に覆われ地山上面で検出した。SD1508と重複しており、これより古い。方向はSD1508とほぼ同じである。確認された長さは、約2.1m、幅1.9m、深さ約20cmを計る。埋土はIV層土によって埋まっている。断面形は半月形を呈する。遺物は埋土中より須恵器片1点が出土した。

SX1510

B区、北西隅付近に位置し、地山上面で検出された。重複関係はない。平面形は不整形をなし、北側に一段高い張り出しを持つ。規模は70×75cm、深さ10cmを計る。埋土は3層に分層され、いずれの層も炭化物粒・焼土粒を含むが下層になるほど混入率を増す。炭化物は、最下層では層状をなしている。なお、南側の張り出し部分には、炭化物・焼土の分布はみられない。底面はすり鉢状を呈する。壁は北側が急角度で立ち上がるが、他は内湾ぎみに立ち上がる。東壁と底面の一部に弱い焼面が認められた。底面レベルは北端が高く南端との差は10cmほどある。遺物は出土していない。

3.まとめ

今回の調査では、土塁1条、溝跡4条、土壤1基が発見された。これらのうち、土塁、溝跡については、過去の隣接調査区で検出していた遺構と連続するものであることから、まず、この点について整理しておきたい。

本調査では、SX1411土塁の東側にSD1413溝跡、西側に新たにSD1507溝跡を検出した。さらにこれらの溝をつなぐ東西溝SD1506も検出した。また、第28次調査区ではSD1413溝跡の東側でこれに直交する溝と高まり(第24次調査区で検出したSX1412土塁の延長の可能性ある)があり、一連の遺構として把握できることになった。ここで問題となるのが、SX1411土塁の積土のありかたで、SD1506溝跡をはさんで南側では20cmほどの積土がなされていたと報告されている(註!)。しかしながら、今回の調査では、この積土の一

部(IV層)が、その分布のあり方から自然堆積層の可能性が強くなった。よって、積土は1層のみとなった。本調査区で検出したSX1411土壘の南半部及び、第28次調査区での溝で区画された高まりは、検出段階では地山が露出していたが、本来的には堆積層及び積土があったものが削平されて現況のようになったものと解釈される。

次に、遺構の年代と性格について考えてみたい。各遺構および堆積層から古代の遺物が出土している。しかし、いずれも小破片であり、それぞれの帰属年代を表しているものとは考え難い。かといって古代以降の遺物も見あたらない。このような傾向は同種の遺構が検出されている第24・28次調査区でも同様である。唯一の手がかりとなるデータは、第24次調査で検出したSX1411土壘が灰白色火灰をブロック状に含む土層の上に構築されていたとする所見であり、年代的には10世紀前葉以降とされている。以上の点から古代よりさかのぼる遺構ではないが、それ以降のどの時代のものは特定できない。

一方、遺構の構成からみると、これらの土壘と溝からなる遺構群は、中世の城館跡に一般的にみられるものである。しかし本例は、縦横の溝で土壘が細かく分断されることなど、中世のものとするには違和感がある。SX1412土壘の東側にみられた小溝群は、道路の路面造成に伴う基礎地業、いわゆる被板状圧痕に類似していることからここに道路が存在していた可能性を示すものといえよう。この土壘と道路がセットになるあたりは、北東に位置する野田館跡の山林内でも丘陵の尾根上を東西に土壘と道が並行して走っている様子が現況で確認できる。さらに明治19年刊行の地籍図には、旧留ヶ谷村と旧高崎村の村界がこのあたりにあり、この境界に沿って道路が存在していたことが示されており、それは野田館跡の道路とつながっていた。したがって、これらのことから本地区検出の遺構群が明治時代あるいはそれ以前に存在した土壘と道であった蓋然性は高いといえる。

最後にSX1510について若干ふれておく。本遺構の特徴は、[①隅丸状方形を基調とし張り出し部をもつ②断面形はすり鉢状を呈する③底・壁面の一部に被熱痕跡をもち、底面上に炭化物層が形成されている]とまとめられる。

以上の特徴をもつ遺構は、「土師器焼成坑」と概念規定、分類されたものに類似点がみられる(註2)。本例についても細かい年代は不明であるが、一応古代の土器焼成施設としてとらえておきたい。なお、市内における類例は、丘陵部のみで検出されており、高崎遺跡で3基(註3)、留ヶ谷遺跡で2基(註4)ある。

[註]

- (註1) 多賀城市教育委員会『高崎遺跡ほか』多賀城市文化財調査報告書第52集 1996
(註2) 痞跡研究会編『古代の土師器生産と焼成遺構』1997
(註3) 多賀城市教育委員会『高崎遺跡-第13~16次調査報告書一』多賀城市文化財調査報告書第42集 1996
多賀城市教育委員会『高崎遺跡-第22次調査報告書一』多賀城市文化財調査報告書第52集 1998
(註4) 多賀城市教育委員会『留ヶ谷遺跡-第1・3次調査報告書一』多賀城市文化財調査報告書第48集 1998

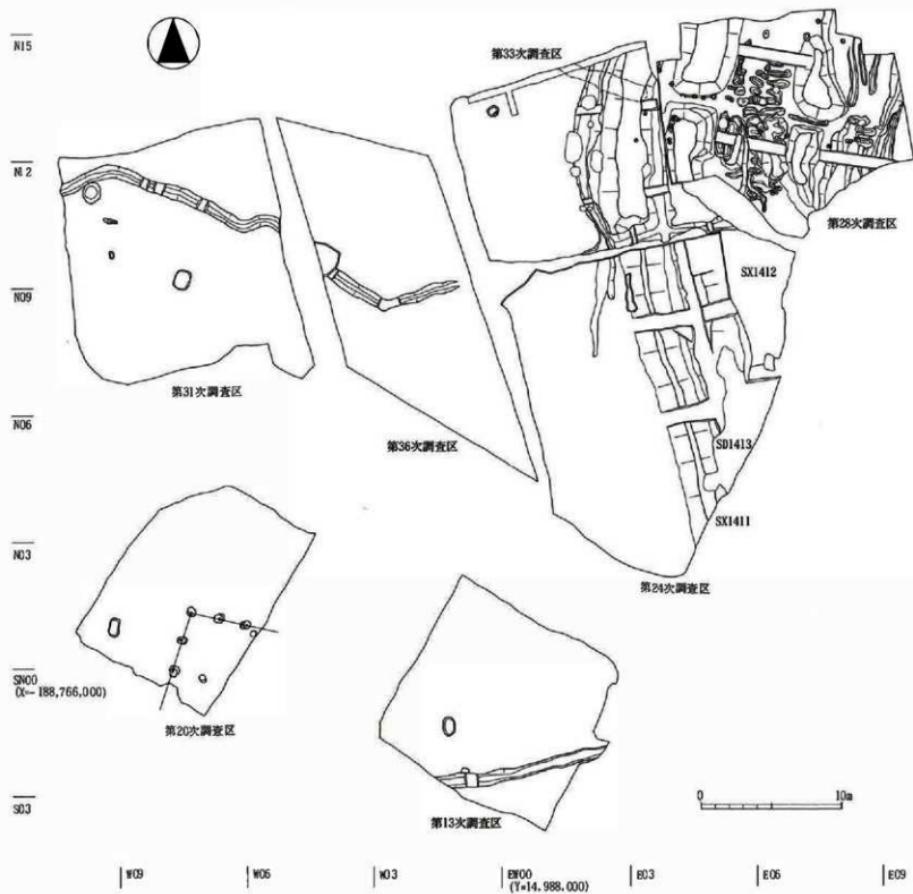


第4図 調査区位置図



第5図 調査区周辺の地籍図（明治19年刊行より作成）

※縮尺任意



第6図 周辺調査区遺構配置図

写真図版1



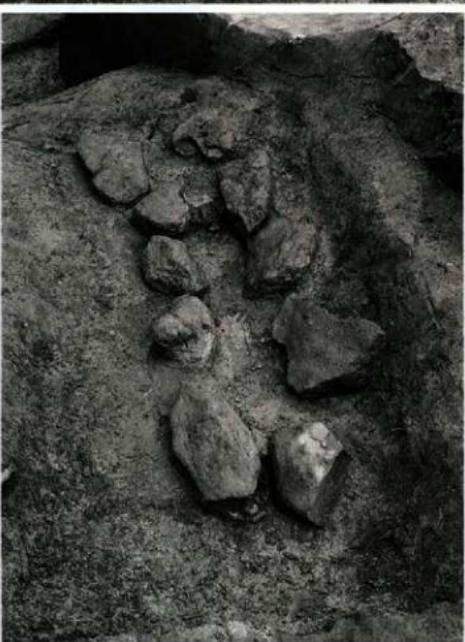
A区全景（南より）



B区全景（南西より）
(高まりがSX14II土壠)



A区SX14II土壠南部
(北より)



左上：SK1411土壠北半部（南より） 右上：SD1413（南より）

左下：SD1508内石組み（西より） 右下：SD1508内石組み下部の状況（西より）

報告書抄録

ふりがな	にしざわいせき							
書名	西沢遺跡ほか							
副書名	西沢遺跡第9次 高崎遺跡第31次・33次							
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第62集							
編著者名	石川俊英 相澤清利 斎藤 稔 車田 敦							
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒985-0873 宮城県多賀城市中央二丁目27番1号 TEL022-368-0134							
発行年月日	西暦2001年3月26日							
所収遺跡	所在地	コ一ド		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
西沢遺跡 (第9次調査)	宮城県多賀城市市川字伊保石地内	042099	18017	38度18分12秒	141度59分49秒	20000727～20001129	425m ²	個人住宅建設
高崎遺跡 (第31調査)	宮城県多賀城市高崎一丁目117-1	042099	18018	38度17分26秒	141度00分14秒	20000411～2000425	210m ²	個人住宅建設
高崎遺跡 (第33次調査)	宮城県多賀城市高崎一丁目117-2	042099	18018	38度17分26秒	141度00分15秒	20000626～20000826	260m ²	個人住宅建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
西沢遺跡 (第9次調査)	集落跡	平安時代 中世・近世	竪穴住居 掘立柱建物 溝 土壙	土師器 須恵器 瓦 把手付土器				
高崎遺跡 (第31次調査)	集落跡	平安時代	溝 土壤 性格不明遺構	土師器 須恵器 須恵系土器				
高崎遺跡 (第33次調査)	集落跡	平安時代	土壙 溝 土器焼成遺構	土師器 須恵器				

多賀城市文化財調査報告書第62集

西沢遺跡ほか

—西沢遺跡第9次・高崎遺跡第31次・33次—

平成13年3月26日発行

編集 多賀城市埋蔵文化財調査センター

多賀城市中央二丁目27番1号

電話 (022) 368-0134

発行 多賀城市教育委員会

多賀城市中央二丁目1番1号

電話 (022) 368-1141

印刷 今野印刷株式会社

仙台市若林区六丁の目西町4-5

電話 (022) 288-6123
